元柳斎の養子（1900歳）

黒ヶ谷・ユーリ・メリディエス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気付いたら洞窟の中。

過去を思い出すことも出来ず、行く当てもなく彷徨っていた子供を拾ったのは――

護廷十三隊総隊長・山本元柳斎重國だった。

これは最強最古の死神と、その養子（孫）になったオリ主が紡ぐお話

山爺「頑張ったようじゃな。よし、飴をやろう」

オリ主「１９００歳になっても子ども扱いはそのままなのか……」

目　次

○話：元柳斎、子供を拾う（原作―約１９００年）――――――　1
一話：元柳斎の養子（孫）、学を身に着ける（―約１９００年）
16
二話：元柳斎の養子（孫）、手段を知る（―約１９００年）――　21
三話：元柳斎の養子（孫）、目を付けられる？（―約１９００年）
30
四話：元柳斎の養子（孫）、鍛えられる（―約１９００年）――　38
五話：元柳斎の養子（孫）、合格する（―約１９００年）――――　46
六話：元柳斎の養子（孫）、変革を齎す（―約１８９９年）――　54
七話：元柳斎の養子（孫）、大海を知る（―約１８９９年）――　59
八話：元柳斎の養子（孫）、死を感じる（―約１８９７年）――　69
九話：元柳斎の養子（孫）、前へ進む（―１８９７年）――――　86

○話：元柳斎、子供を拾う（原作―約１９００年）

――気付いたら岩山の洞窟にいた。

何を言っているのかと思われるだろうが、それは俺の方こそ言いたい。自然あふれる土地に最近行った覚えもないのに寝て起きたら洞窟なのだ。起承転結の結以外すべて無いから困惑しかない。

夢遊病を患っている訳でもない。そういう風に、誰かに指摘された事も無かった。

ならば何故ここにいるのか、と寝る前の記憶を掘り返す。

ズキ、と頭に痛みが走った。

最初は一瞬走っただけ。それに気を取られて思考も止まったが、すぐ痛みが治まったので、記憶を掘り返す作業を再開した。

そうしたら、また頭痛がやってきた。

今度はそれに耐えながら思い出そうとする。だが、そうするほどに痛みはどんどん強くなる。うすらボンヤリと脳裏に誰かの顔の輪郭が見えてきた……そんな時には、ガンガンと直接頭を殴られているかのような痛みになっていた。

「っぷあッ！　むり！」

堪らず声を上げ、背中から倒れる。ガヅッ、と僅かに盛り上がった岩肌が背中に強く当たり、また別の痛みにもんどり打った。

しばらくして痛みが遠のいた時には、もう過去を思い出そうとしても無駄だと諦める事にした。

ボンヤリ残っている気もするが、思い出すのを拒むように痛みが出てくるという事は、その過去は俺にとって思い出さない方が幸せな事なのだろうと思う事にしたのだ。というか、そう考えないとふとした拍子に思い出しそうで怖い。

まぁ、実際、それどころじゃないからでもある。

「……ノド、乾いたな……」

過去の俺がどういう生活をしていたか知らないが、洞窟の中を見回しても飲み食い出来る物資はロクに置かれていない。つまり着の身

着のままというヤツだ。
これは非常によろしくない状況だと、俺は内心で焦りを覚え始めた。
飢餓感はないからまだいいが、乾きを覚えているとなればそう悠長にしている場合ではない。そんな思考が浮かんでくるのだ。多分無意識部分の過去の俺の直感だと思う。
過去の記憶については後回しにすると決めたのは、乾きが決め手だった。
「今は明るいし……明るい内に、動こう」
洞窟の外からは煌々とした日の光が入ってきている。少し出口に近付けば、眼前には鬱蒼とした森が広がっていた。
太陽は中点に差し掛かっている。ちょうど昼と考えれば、夜まで残り四半時（しはんどき）くらいだろう。それまでに飲み水と、出来れば何か食べられるものを見つけておかないと明日が辛い。そして夜は動くべきではない。
そんな考えが瞬く間に浮かんだ。
「……過去を覚えてないクセに、なんでそういう事は浮かんでくるのやら」
はぁ、とため息を吐く。そうしても意味は無いだろうが、そうしないとやってられなかった。
＊
暫く森の中を探索すると、清流を見つける事が出来た。
一先ずそこを辿って山とは反対側――つまり、川下に向かって歩く事にする。川下に向かえば人里に当たると思ったからだ。
「とりあえず、まずは水を飲もう……」
陽光を銀色に跳ね返す小川に近付き、柔らかい下草に覆われた川べりへと身を投げ出す。
そこで、俺は自分の姿を初めて認識した。
顔はお椀を作るように合わせた手と同じ透き通るような白色。瞳の色は屈んだ俺の顔の横から垂れている髪と同じ黒色で、大きく光っていた。

総合して言えば、水面に映っていた俺の容貌はとても幼く見えた。少なくとも大人ではないと思う。
どうりで目線がちょっと低い訳だ、と辺りを見回した。
比較対象がないから分かりにくいが、多分手は小さく、腕や足も短いのだろう。
「てか、どう見てもこの服小さいな……」
今更ながら、俺はいま身に着けている服の丈が短く、小さい事に気が付いた。
俺が着ている服は浴衣のようなもの――そうパッと思考に浮かんだ。ただ、色は白色一色で、少し泥や埃でくすんだ色に汚れてしまっている。俺が記憶を失う前、あの洞窟へ向かう間とこの小川に来るまでで汚してしまったらしい。
とても汚れが目立つが、いま洗うわけにはいかない。単純に替えが無いから体を冷やしてしまう。
なんにせよ、俺はどうやら白い浴衣一枚しか着ていない小さな子供らしい。
自分の事も覚えていないとこうも不便なのかと思いながら、俺は水をすくい上げ、喉を潤した。キンキンに冷えたそれが喉を伝っていくのを感じ、ほぅ、と息を漏らす。
何度かまた水を飲み、余裕が生まれたところで、ふとある疑問が浮かんだ。
「……親はどこだろう」
無自覚に口からその疑問を漏らす。
子供なら親も居る筈だ。そんな当たり前の思考が浮かんだが、すぐに無いな、と自分の中で答えが出た。そもそも親同伴なら目覚めた洞窟にそれらしいものの一つがあってもおかしくない。
だとすれば、答えは一つ。
捨てられたのだ。
理由はたぶん、食い扶持を減らすためか。服一枚で放り出すとなれば余程切羽詰まっていたと見える。こんな人里離れていそうな森の奥に放り出したのだ。もう帰って来ない事を祈っていたに違いない。

「……なら、人里を目指すのはマズいか……？」
水を飲んで余裕が生まれたからか、次から次へと思考が続く。
ただの予想だが、おそらく口減らしのために捨てられたのだとすれば人里を目指すのは得策ではない。日照り続きで作物が育たず、飢饉にあったのだとすれば、子供を受け入れるところは無いに等しいはずだ。それどころか殺されて、畜生のエサにされる可能性すらある。
とは言え……子供がひとり、森で生きていくのも厳しいものがある。
気候はまだ温かいが、これが秋、冬と徐々に寒くなっていけば手に入れられる食糧は少なくなるだろう。なら今が楽かと言えば、そうでもない。野生の動物に勝てる自信は無いのだ。
「一先ず、地形把握を続けようかな」
予定を変更し、雨風を凌げる洞窟を拠点にし、そこから徐々に探索範囲を広げる事にした。今日のところは水源を見つけたからよしとする。
あとは日没まで果物なり野菜なりを見つけられれば御の字だ。
そう決めて、俺は小川を中心に森の探索を始めた。
＊
探索を開始して程なく、一つの発見があった。
それは抜き身の刀が落ちていた事だ。それも一本ではなく、三本ほどがバラバラの場所に落ちていた。
なぜそれが落ちていたのか。
理由は単純――――持ち主であろう人達が、死体になって倒れていたからだ。
「……ヤバそうだな」
複数の死体を目の当たりにして、俺は思わず足を止めていた。抜き身の刀が突き立っている時点でなんとなくしていたイヤな予感がビンビンと今は最大限の警鐘を鳴らしている。
おそらく――いや、ほぼ間違いなく、この三人の人達を殺した何かが近くにいる。
そして、立ち止まっていたら今度は俺が殺られる――――！

「チィ――――ッ！」
激しく舌を打った俺は、裸足で地を蹴った。踵は返していない。
とどのつまり、地面に突き立っている刀の方へ駆け出していた。
多分野生の獣にやられたのだろう男達を見て、逃げる選択は外していた。今から逃げても多分無駄。というより、身を守る手段をせめて一つくらい持っておきたい。そんな考えが、体を動かした。
身を護る術がないのはとても心細く、恐ろしいのだ。
「ごめんなさい、お借りします……！」
近くに転がっている遺体――首をかみ切られて絶命している――に一言断りを入れ、刀を地面から抜く。その遺体から鞘も拝借し、俺が着ている白服の帯に素早く差した。
自身の背丈と比較してやや長い刀を両手で握り、辺りを警戒する。
さわ……と風が足元の丈の低い草を揺らす。梢の葉もかさかさと音を奏でている。
怪しい音は特に聞こえてこない。
――これだけ血の匂いがしているのに、居ないのか……？
何秒と待ち構えても変化のない状況に、俺は疑問を浮かべた。
俺が来た方は風上だったから気付かなかったが、風下で匂いを嗅げば、相当な血の匂いが立ち込めているのが分かる。匂い的に、多分この人達が死んでからそう経っていない。
血の匂いに敏感なら野生の獣ならここぞとばかりに来るはずだ。腐っていない死肉は、獣のごちそうなのだから。
それから更に待ち構えたものの、一向に獣の気配や音すらしなかったため、俺はその場を後にする事にした。
刀の消耗を考えて残る二本、それから着替えとして彼らが纏っていた黒い浴衣も拝借する。結果、三つの遺体は白い浴衣姿になった。
「ごめんなさい。いつか、お返しに来ます……」
本当は弔いもしたかったが、流石に土を掘る道具がないし、周囲に危険な存在もいると考えられ、今日は洞窟へ帰ることに決めた。
その間に亡骸は風化していってしまうだろうが――いずれ弔いに来る目印として、三人一緒に一際大きな樹に寄り添わせ、一抱えの石

を三つ同じように並べた。石を見れば余程の天変地異が起こらぬ限りそこにあり続けるだろう。
一度手を合わせて冥福を祈った後、俺はその場を後にした。
＊＊＊
「なに、帰還報告が無いじゃと？」
「はい。宿舎にも戻っていないようです」
「むぅ……そうか」
部下の報告にひとつ唸り、顎を撫でる。
尸魂界（ソウルソサエティ）の守護、魂魄の管理、またそれらを害する存在・虚（ホロウ）の討伐を目的とする組織【護廷十三隊】を設立して早百年。斬術、白打、走術、鬼道の四つの技術を確立し、ある程度隊員の生存率も上がってきた。気性の荒い連中だが腕が立つことは確かだ。
それでも、互いを喰らい合って力を高める虚には届かない事もある。
おそらく今回もそうだったのだろう。
「……して、その者達の任務とは？　儂に上奏する程じゃ。緊急性が高いのであろう？」
しかし、それは茶飯事に近い出来事であり、【護廷十三隊】創設者にして総隊長・一番隊隊長を務める儂――山本元柳斎重國に直接伝えるほどではない。しかし伝えてきたという事は、それだけ自体が切迫したものであると副隊長が判断したという事だ。
そう考え水を向けると、伝令兵がはっ、と返事を返してきた。
「その任務は……東流魂街の、警邏にございます」
「……なに？」
その返答を聞き、思わず顔を顰める。
流魂街というのは、現世で成仏し、尸魂界に流れてきた魂魄たちが住まう住居区画の事を指す。中にはこの尸魂界で生まれた者達もいるが、大部分は現世で亡くなった者達の魂魄だ。彼らはある程度生きた後、自ずと輪廻を巡り、次の命へと還っていく。
ちなみにその流れは自分を含む死神――霊力を扱える魂魄――も例外ではない。我らが死んだ時は新たな輪廻を巡る、そういう風に出

来ている。
尚、虚は墜ちた魂であり、死神が持つ武器《斬魄刀》で浄化する必要がある。
そして虚共は力を得ようと魂魄を喰らう性質がある。霊力を有する魂魄によく狙いを定める連中から現世の命ある魂魄を守るため、我ら護廷は存在する。
つまり虚は原則、現世か、あるいは虚の世界【虚圏(ウェコムンド)】にしかいないのだが、時折尸魂界に来る魂魄の流れを嗅ぎつけ、紛れ込んでくる個体がいる。あるいは直接虚圏から来るものもある。
それらから流魂街の魂魄を守るべく、定期的に外れの森に警邏を回しているのだが……
「……」
沈思を続ける。
警邏任務は、護廷に属した新人隊士に回すようにしている。尸魂界に来る個体は基本的に弱いからだ。そこで経験を積み、現世の守護任務の際に出会うそこそこの個体と張り合えるようにしていく。それが基本の流れとしてこの百年で確立している。
無論、新人隊士が命を落とす事も少なくなかった。それを防止するため、数年以上の経験を積んだ隊士と組ませるよう徹底もしている。
その上で、となれば……
「……席官以上でなければならん、か」
十三ある隊の中でも上位の戦闘力を持つ者達。それを《席官》と呼称しており、三席から十席まで存在する。一席は隊長、二席は副隊長なので居ない。
それらの席次の決まりは任務の勤怠、戦闘力、事務処理能力などの総合評価になるが、ほとんどは戦闘力で決定されると言っても過言ではない。純粋に、護廷十三隊に最後に必要となるのが戦闘力だからだ。
とは言え、席官に取り立てられたとしても他の隊士とそこまで差が無い場合も少なくない。
「――仕方ない。儂が出よう」

「は……はっ?! 総隊長、いまなんと……?」
「儂が出ると言ったのじゃ。最近虚と対峙しておらんからの」
ふぅ、と息を吐きながら立ち上がる。傍らに立てかけていた杖――その中には自身の斬魄刀がある――を手に取る。
慌てる伝令兵だが、総隊長が出張ってはならない決まりもない。
それに――――
「我が一番隊の隊士の弔いにもなろう」
自身の部下が死んで黙っていられるほど、まだ落ち着いてもいないのだ。
そうして一番隊隊舎を後にした。
＊
神速の歩法《瞬歩》を使い、伝令兵から聞いた警邏地点へすぐ赴いた儂は、濃い血の匂いに気が付いた。風の流れを追って走れば、その場所にすぐ辿り着く。
「これは……」
それで、驚いた。
虚に喰われただろう隊士達は、一際大きな樹の根本に並べられており、その横にも墓石代わりと思しき三つの岩が置かれていた。死神が纏う死覇装（しはくしょう）と斬魄刀は無いから、この場にいた誰かに持って行かれたのだろう。未だ気性の荒い魂魄がのさばっているからそれは仕方ない。
だが――本当に気性の荒い者が持って行ったのか、とも思う。
そんな輩であれば墓石のように石を並べるだろうか。むしろ謝罪代わりに弔ったように見えなくもない。
「……誰かは知らんが、その心遣いには感謝せねばな」
斬魄刀を持ち去ったのもおそらく荒くれ者からの自衛手段のためだろう。通常の魂魄が真価を発揮する事は出来ないが、刃物には違いない。
隊葬に不可欠という訳でもない。無論、あるべきではあるが。
「しかし……はて、虚の霊圧がまったくせんの……」
物思いに耽りながらも、我が隊士三人を葬ってくれた虚の探知は欠

かしていない。しかし妙な事にそれらしき霊圧――霊力を持つ魂魄が放つ波動――は感じられなかった。
その代わりに一つ、虚の禍々しいものとは違う清涼な霊圧を感じられる。
これは人の魂魄のそれだ。
「流魂街からは、大きく外れておるのじゃが……まぁ、大方逃げてきたのじゃろうな」
魂魄の中には霊力を持つ者と持たない者がいる。後者は死している故に食事を摂らなくていいが、前者は霊力で魂魄を削っていくため、食事による補給を欠かす事が出来ない。
尚、水は両者ともに不可欠である。
それゆえ流魂街の治安の悪い地域では物取り、殺人などが絶えず横行しているという。そういう地域ほど警邏すべき森の付近になるから、ここに逃げ込みやすくなる。そうやって逃げ延びようとしたものが糧食に喘ぐ霊力持ちの魂魄だったという事だろう。
「仕方ない。まずは、あの魂魄を保護するかの」
そして瞬歩を使い、魂魄の下へ一気に移動する。
移動した先は洞窟の前だった。
その中に一人の子供が座っている。
その傍らに三本の斬魄刀、三枚の死覇装があるのを見て、あの三人から取っていたものだと分かった。同時に弔いをした者である事も。
「んな――――ッ?!」
月明かりを遮った事ですぐこちらに気付いた子供が驚愕を露わにする。それから傍らに置いていた刀を手に取り、柄に手を掛ける。
その構えを見て目を眇める。
「ほう……中々様になっておるのぅ」
その賞賛は、幼さを加味しているものの、型もへったくれもない荒くれ隊士に比べれば随分マシなものだった。惜しむらくはその背丈に刀の長さが合っていない事か。
子供特有の柔らかな肌をしているのを見るに、荒事にはあまり向いていない事が窺える。

だが――構えもそうだが、目がそれを否定する。
鋭く吊り上がった双眸は猛禽のそれを思わせるほどだ。黒い瞳は炯々とした光を宿し、こちらの出方を伺っている。
「……お主、生前は豪族の家系か？」
浮かんだのは、その可能性だ。未だ幼いが、その頃から豪族の何たるかを叩き込まれていたのだとすれば辻褄が合わなくもない。
「生前……？」
しかし、こちらの予想に反した反応が返ってくるだけだった。更に言えば生前か何かまで認識していないと見える。
流魂街出身の魂魄だとしても、現世から来た魂魄の話を聞き、ここが死後の世界であると認識する。
しかしこの子供にはそれすら欠けているらしい。
「うむ。ここは尸魂界。現世で死んだ者の魂が辿り着く世界じゃよ」
「ソウルソサエティ……死んだ者が、辿り着く世界……？　え、じゃあ俺、死んでる……？」
瞠目し、信じられないと自身の体を見下ろし始める少年。右手で全身を触り始めている。死んでいれば透けるはず、という考えはあるらしい。
とは言え――それは尸魂界の常識を知らなければ、仕方ない反応でもある。
「この世界では、死した者の魂……魂魄には肉体がある。触れるのもおかしな話ではない。無論現世では物に触れられんがの」
「魂魄……ユーレイの事か」
「そうじゃ……――――話を変えるが、儂はお主の保護に来たのじゃよ。元々は我が隊士三人の仇討ちのようなものだったがの」
「三人……あっ」
こちらの話で察したらしく、刀と死覇装に視線が行き来した。
それから表情がくしゃりと歪む。
「……ごめんなさい。遺体漁り、しました」
叱られると思ったのか、その子供は素直に頭を下げ、謝罪してきた。
その潔さにほぅ、と声が漏れる。

「やけにあっさり白状するのぅ」
「事実ですから。というか……隠せるわけないし」
「うむ、まぁの。隠していれば拳骨の一つでも見舞っていたやもしれぬ」
　ぐぐっ、と力を込めて握り拳を作れば、ひぇっと子供は身を引いた。
「安心せい。謝罪は受け取っておるし……あ奴らを弔ってくれたのも、お主じゃろう？　別に怒ってはおらんよ」
「……ありがとうございます」
「うむ――さて、話は一度終いじゃ。こっちに来なさい。霊力を持つお主にぴったりな場所に行くからの」
「あ、はい」
　ちょいちょいと手招きすれば、子供は足取りはやくこちらに来た。手を差し出せば、おずおずと握る。
「しっかり握っておれよ」
　そう一言掛けてから、儂は瞬歩で尸魂界の中心――《瀞霊廷》へと戻った。
＊
　瀞霊廷に戻った後、副隊長に子供を任せて再度森に向かおうとした儂は、その副隊長に止められてしまい、隊舎に留まる事になった。今は代わりに副隊長率いる席官達が現地に向かい、隊士達の遺体回収ならびに虚の捜索を行っている。
　一番隊隊舎に戻ってきた儂は、子供を椅子に座らせ、対面に腰を下ろした。互いの前には淹れたての緑茶と煎餅を置いてある。
「好きに食べなさい。茶は熱いから、気を付けるのだぞ」
「あ……はい」
　一気に物事が進んで驚いているのか、子供は生返事を返してきた。徐に湯呑を手にするが、一向に呑む気配はない。
　その様子を見ながら、ずず、と先に茶を啜る。
「……あつっ」
　それを真似るように子供も口先だけ茶に付ける――が、すぐ引っ込めた。どうやら熱過ぎて飲めないらしい。同じ判断をしたらしい子

供はあっさりと湯呑を置いた。
ほんの少し不貞腐れ顔に見える。
そのまま煎餅に手を伸ばした子供は、すぐそれにかぶりつき、パキッ、といい音を立ててそれを割った。ッバリボリと硬い音を立てながら咀嚼し、それを飲み込む。
「甘辛い」
「醤油煎餅じゃからの。美味かろう？」
「美味しいです」
にこりと微笑み、手に持った残る煎餅を一口に噛む。
それに満足と頷いた儂は、煎餅を飲み込んだのを確認してから子供に話しかけた。
「さて、一息吐いたところで自己紹介といこうかの。儂は山本元柳斎重國、この尸魂界の守護を担う護廷十三隊の総隊長を務めている者じゃ。お主の名は何という？」
「な……名前……俺の、名前……」
ただ名前を聞いた。それだけだというのに、子供は煎餅で見せた笑顔をすぐに消し、くしゃりとまた表情を歪めてしまった。
そして、絞り出すような声で言った。
覚えてません、と。
「……覚えていない、と。名が無いのではなく？」
その問いに、子供は頷く。
流魂街で生まれた者の中には、物心ついた時には親に捨てられていた者も少なくない。そういった者は親から名を付けられていない事がある。そういった者達は地名や身体的特徴、または他人に呼ばれ始めたあだ名を自らの名にすることが多い。
だが、この子供はそれらの例から外れるようだ。
「過去を、思い出そうとすると……凄く頭が痛くなって……」
そう続ける子供の顔はかなり歪んでいる。いまも思い出そうとして、それで頭痛が起きているようだ。
「無理せずともよい。分かる範囲でいいのだ」
一旦思い出すのをやめさせるべくそう言った。子供もそれに倣う

が、しかし困った事に今日の昼頃目が覚める以前の記憶はまったく無いらしい。自身の背格好も小川に反射した時に知ったという。
記憶喪失という事だ。しかも、かなり重度の。
霊力持ちである点から見て、これは結構重大な案件である。
死神として虚と戦えるのは霊力を持つ者のみ。つまり、魂魄の中でも限られた者にしかなれないのが死神だ。だから霊力を持つ者は出来る限り引き込むよう隊士に指示を出している。その網から抜けたのがこの子供という事のようだ。
見たところ外傷はない。つまり、頭を強く打ったなどが原因ではない。
ならば魂魄自体はどうかと思ったが、こちらも特に問題は見られない。強いて言うなら霊力がやや強いくらいか……
つまるところ、記憶喪失の原因は不明だ。
――ならば今後どうするか、という話をするべきだろう。
「では名については後にするとして……お主は今後どうする？　護廷を率いる者としては、霊力を持つお主を所属させたいのじゃが」
「その……さっきから出てる、護廷というのは……」
「先も言ったようにこの尸魂界を守護する組織じゃよ。現世の魂魄を守護する事も含まれておる。呼び名は死神じゃ」
「しにがみ……」
それから数度繰り返し呟いていた子供は、徐にこちらを見上げてきた。
「俺、なります。死神に」
「……良いのか？　死神は、虚という悪霊と戦う必要がある。お主が見たように死ぬ事もあるぞ」
「それでも、何もないトコに戻るよりマシです……死にたくないですから」
ぎゅっ、と白装束の裾を握る少年。不安に駆られているのか僅かに震えている。
だが――やはり、目はまっすぐこちらを見据えている。
恐怖に打ち克つ強い眼をしていた。

「――良いじゃろう。ならばお主には、まず名が必要じゃな。名が無ければ死神統学院に入学する事も出来ぬ。せっかくじゃ、儂が付けてやろう」
「いいんですか」
「構わんよ。勿論、お主が自分で付けたければそれでも構わんが」
「それでいい、山爺に付けて欲しい」
「……むおっ？」
思わず変な声が出てしまった。
確かに自分はすでに老いて久しいが、そんな呼び方をされたのは初めてだ。いつも総隊長と言われていたせいだろう。護廷十三隊を組む前は自分も相当な荒くれ者だったから誰も呼ぶはずもない。
だが、この子供はそんな過去を知らず、ただ純粋にそう呼んだ。
……悪くない、と思ってしまった。
「……なにか、気に障ることを言いましたか？」
「いや……なに、気にしなくてもよい。それより名前じゃな……」
ずず、と茶を啜りながら思考を回す。
考えるべきは名前だ。名字は――まぁ、養子として取るのもいいかと考え、山本でいいだろう。これまで考えもしなかった事だが存外抵抗感は無い。
残るは名前だが、これがどうにも難しい。
月夜の下に出会った子供はいかつさとは無縁の儚さを伴った少年だ。斬魄刀がそうであるように、真名呼和尚曰く『名は体を表す』ともいう。つまり子供の容姿、人格、そして雰囲気全てに合った名前を付けるべきだと考える。
「――うむ、決まったぞ。お主の名は『山本悠璃』じゃ」
あらゆる字義を考えた末、最終的に『悠璃』という名に決めた。
『悠』の字には、精神的には気が長く、おおらかという意味がある。人の名前に付く場合は気長に、堅実にという意味に転ずる。それを込めてこの時に決めた。
そして『璃』は宝石の名前の一つとして使われている。瑠璃は、夜空を思わせる色合いを持つ宝石だ。その色味から透き通るような美

しさと綺麗な心を持つようにと、現世で子供に付ける時は願われているという。
その二つの字義を合わせた名前――それが、悠璃だった。
書道を嗜んでいたから字義について知っていたから助かったと思う。
「悠璃……山本悠璃、俺の名前……」
自覚するように、馴染ませるように繰り返し名前を呟いていた子供――悠璃が、ふとこちらを見て首を傾げた。
「山本って……山爺と同じ？」
「うむ、同じ苗字じゃ。立場が立場じゃから贔屓は出来ぬが、お主が死神になれるよう場は整えよう」
改めて認識すると、なんとなくむず痒い。早口に言うだけ言って口を閉じる。
すると、一瞬押し黙った悠璃は、すぐ表情を綻ばせた。
「――ありがとう、山爺。俺、頑張って死神になります！」
花が咲くような笑顔と共にされた全力の宣言。
それに儂は、うむ……と、深く頷く事しかできなかった。

一話・元柳斎の養子（孫）、学を身に着ける（―約１９００年）

山爺こと、総隊長・山本重國に引き取られた後、俺は豪華な邸宅に暫く住みながら死神のための学校――死神統学院に入学するための準備に追われた。

その名も――勉強だ。

山爺曰く、霊力だけでなく基本的な学力も測るため、それなりに勉強しておかなければ入学は出来ないらしい。とは言え今は死神の数が足りないため、余程の問題児でなければ大体は隊士になれるという。

「じゃが虚も強力になりつつある。誰もかれも入隊という訳にはいかん。いたずらに犠牲を増やすばかりか、その者を護ろうとする者達をも犠牲にしかねんからの」

厳しい面持ちで山爺が言う。何故だか、言わんとすることは理解できた。こちらの頷きを見て、更に最強の死神は続ける。

「無論真面目に鍛錬を積んでもどうにもならぬ事もある。まだ己では届かぬ段階、という奴じゃ」

「今の俺と山爺みたいな感じ？」

「うむ。例えば悠璃が斬魄刀を儂に突き立てたとて、儂は傷一つ付かぬ。お主より濃密かつ膨大な霊圧を儂が持っているからじゃ」

「……つまり、俺も大きな霊圧を持つようになればいいと」

俺の言葉に、然り、と重く頷かれる。

「基本的に死神の霊力……もとい、霊圧は肉体的成長と鍛錬によって自然と増大する。更にそこから増加するのは斬魄刀の解放くらいじゃ。逆に言えば、それ以外の手段は殆どないに等しい」

「なるほど……でも、鍛錬って？」

「霊力を扱う戦闘技術の反復練習じゃ。限界まで霊力を使い、それを回復させる。これを日々繰り返すことで僅かながら限界量の増大が

見込める」
とは言え――と、山爺の言葉が続く。
「儂を始め、隊長格ともなれば霊力が膨大過ぎて使い切る事そのものが無くなるのじゃが」
とどのつまり、そんなに使い切る機会が無いから、どうしても頭打ちになる頃があるとのこと。理論上は無限大に上げられるが、使い果たす機会が無いらしい。
霊力残量イコール霊圧は、残量が多ければ多いほど強力な力へと変換され、周囲に及ぼす影響が甚大になる。そんな高みにある隊長格が力を振るっては、守るべき魂魄を傷つけてしまうという本末転倒な事態になりかねない。だから使う訳にもいかず、結果頭打ちに会うという理屈だという。
「むむ……じゃあ、隊長格の霊圧はみんなどっこいどっこいなんですか？」
「下限はの。上限に関しては、やはりまちまちじゃ。気持ちによっても左右されるから一概には言えんしのぅ」
「へぇ……」
凄く怒っている時は霊圧がより強大になるが、悲しい時は普段より弱くなる、そんな変化を霊圧知覚から読み取ることも出来るらしい。それの応用で、相手の出方を探って先手を取るなんて事も出来るという。
虚相手にそんな読み合いはまずしないがの、と山爺は補足を付け足した。
悪霊になった虚は、胸に空いた孔――欠けた心を埋めるために他の魂魄を喰らう。その様は正にケダモノのそれで、理性を保っているものはごく少数に限られるらしい。そしてそのごく少数も、たいていは本能的に動くため理知的とも言い難いのだという。
「――さて、ここまでが前振り。本題はここからじゃ」
そう言って、さらりとした綺麗な紙をこちらの机に置く。更にその隣に綺麗な硯（すずり）、筆もコトリと置かれた。
「お主にはまず読み書きを覚えてもらう。既に読みが出来る事は分

かっているから、特に書字の方じゃな。未だ識字に困る隊士も多い故、悠璃はそうならぬよう備えておかねばならぬ」
「字が解らなくても隊士になれるんですか」
それは実際どうなんだ、と思いながらの問い。それに、山爺は途端に顔を顰めた。
「うむ……だからこそ、書類仕事が溜まりやすくての。その隊を率いる者が決めなければならぬものもある故、隊長格は必然的に字を覚えなければならぬのだが、問題はそれ以外じゃ。隊長以外にも行える事務すらマトモに行える者が少ない」
そもそも死神の絶対数が少ない上に戦死する事も少なくないため、学院卒業と共に隊士になる数を込みにしても総数は増えるかトントンがせいぜいらしい。長らく務めている者の中には識字を覚える者もいるが、間違って覚えている者もおり、その修正に手を回している……というのを繰り返しているという。
修正をしている間にも書類は増えるため、結果仕事が皆無になる事は極めて稀らしい。
ちなみに俺を拾った今日は、その極めて稀な日だったと山爺は言った。
「悠璃が隊長格になるかは分からんが、読み書きは出来て損は無い。少なくとも仕事場の仲間から嫌われる事も無かろう。ここに学院入試用の教本があるから、それの書き写しで覚えていくとよいじゃろう」
その言葉と共に、山爺の死覇装の懐から一冊の本が取り出された。表紙に『学院入試用教本』と書かれているそれは、少々年季の入ったものなのかところどころ色染みが見える。
それを受け取った俺は真っ先に表紙を捲った。
「うぁ……」
表紙を捲った一ページ目は目次だったが、二ページめからつらつらと達筆な筆文字で書かれているのを見て、くらっと眩暈がした。文字を読み解くのもそうだが、こうも崩れていては模写するのも手間である。

しかし、やらなければならない。
出来なければ学院に入れないのだ。
頑張ろうと、俺は気合を入れて模写に取り掛かった。
＊
山爺に拾ってもらってから七回月が沈み、太陽が昇った。山爺曰く、一日を七個分揃えると一週間という呼称になるらしい。
なんとなく知っている気がしたが、どこで聞いたかはやはり思い出せない。
ともあれこの一週間、只管教本の模写と勉強に励んだ俺は――いま、居候している邸宅の中庭に連れ出されていた。
俺の手を引く山爺は反対の手で刀を一本持っていた。いつもは木の杖なのだが、今日はそうではないらしい。
「山爺、それって山爺の斬魄刀？」
中庭の中央について手を離された後、俺は問いを投げた。
しかし、帰ってきた答えは否、の一言。
「これはな、悠璃の斬魄刀じゃ」
「……俺の？　でも、学院にまだ入ってないけど……」
斬魄刀は寝食を共にし、練磨を重ねて己の魂を移していくことで、真に〝己の斬魄刀〟を形作るもの。つまりこの【浅打】に自身の魂を写し取り、己の斬魄刀へと進化させる。
しかしこれは死神候補生――つまり、統学院に入学できた生徒全員に貸与され、護廷十三隊に入隊すると同時に正式授与されるものだ。だからまだ入試も受けていない俺が持つべきものではない。
俺の考えを読んだか、うむ、と山爺は一つ頷いた。
「確かに悠璃は入学しておらん。じゃがの、あの学院は儂が創立したものでな、多少の融通は利かせられる。流石に無条件入学はさせられんが……入試合格域を超えておるからの。ちと特別待遇じゃ」
それと、と山爺は続ける。その視線は刀ではなく、俺に定められていた。
「悠璃も知っての通り、コレは己の魂を写し取り、己の斬魄刀として形作るものじゃ。つまり……己の半身とも言える存在と出会えば、悠璃

の記憶の手掛かりを得られるのではないかと思っての」
「……！」
そこまで言われれば、流石に分かった。先の特別待遇の真意は、俺の過去の記憶を思い出す一手になればという山爺なりの気遣いだったのだ。
先に斬魄刀を与えて発破をかけるつもりだったのかと思っていた。
「いや、それもあるにはあるがの」
「あ、あるんだ……」
やっぱりあったらしい。
でも――それはそれとして、素直に嬉しかった。
山爺に差し出された刀を両手で受け取る。形状は以前亡くなっていた隊士から失敬したモノと同一だが――どうしてか、ズシリとした重みを感じた。
「今日からそれはお主のものじゃ。己の斬魄刀を形作るべく、寝食を共にし、練磨を重ねるように。それと一日一度は刃禅を組むんじゃぞ」
「はい」
「うむ……さて、ではこれから茶を飲むとするか。茶菓子は何がいいかの？」
「醤油煎餅！」
「かっかっか！　悠璃はそれが好きじゃのう！　どれ、まだ棚に残っていたか」
帰り道は逆に俺が手を引いた。笑いながら家に戻り、お気に入りの湯呑にお茶を淹れて、煎餅を食べて話す。
その時間が、この一週間で俺は堪らなく好きになっていた。

二話・元柳斎の養子（孫）、手段を知る（―約１９００年）

「騙された」

うー、と不貞腐れた顔で子供が唸る。不満たらたらなその視線をまっすぐ向けてきていて、明らかな抗議の意志が見て取れた。

理由は明白。

儂が統学院入試の時期を教えていなかったからだ。

統学院は春真っ盛りの頃に入学式を行う事となっている。そして入試はその一月前に行われる。

しかしながら、現在は夏。現世で言えば六月から七月といった頃か。入試を迎えるまで半年以上ある。しかしそれを教えておらず、来る日も来る日も模写と勉学、刃禅だったことで入試まで時間が無いと悠璃は思っていたらしい。

まず最初に教えろ、と不満に思っているという訳だ。

「……まぁ、確かに教えていなかった儂も悪いが、これはちと理不尽じゃろ。思い込みまでは流石の儂も分からんぞ」

「むー……」

儂の弁解も聞く耳持たずか、まだ悠璃は不満げだ。

――しかし、珍しい。

悠璃を拾ってはや一ヵ月。この間にここまで不満たらたら――というか、どこか我儘を言っているような姿は見た事がなかった。まぁそれも入試に合格しようという気概が原因なのかもしれない。この姿は、ずっと我慢していた事へのぶり返しなのだ。

そう思えば、好きにさせた方がいいのだろう。

よくよく思い返せば、この子は記憶を失っているのだ。統学院入試の時期は流魂街でもちょっとした噂になるくらいには注目されている行事の一つ。それ故、自然と誰もが春の入り頃に入試があると認識していた。その意識で居たから今回の事に繋がったと言えよう。

悠璃からすれば、自分だけ蚊帳の外にいるように感じてもおかしくない訳だ。
その疎外感を嫌がってこうも我儘ぶっているのかもしれない。
この反応をする者は初めて相手にするのでどうすることが最善か分からない儂は、とりあえず話を切り替える事にした。なんだかんだこの一ヵ月でおおよその性格を把握しているため今回の不満もそう長引かないだろうと考えていた。
「仕方ない。詫び代わりと言ってはなんじゃが、悠璃に貸した教本にはないコトを今日は教えてやろう」
「……！」
よく言えば詫び代わり。悪く言うなら思い付きで発したこの言葉は、儂が思っていたよりも悠璃の琴線に触れるものだったらしい、不満げだった顔が途端ぴんと興味津々のそれに変わったのが見て取れた。
死神になろうという気持ちは本物らしいから、その意欲がそうさせるのだろう。
「よろしくお願いします！」
「現金なヤツじゃのぅ……」
呆れたように半眼を向ければ、悠璃は頭を掻きながらはにかんだ。改善する気は無いらしい。
……まぁ、それでもいいか、と儂は思考を放り投げた。死神になる事に意欲的なのは良いコトなのだから。
卓上にあった湯呑を傾け茶を啜った後、儂は隅に置いていた筆を手に取り、用紙にサラサラと文字を書く。合計二枚に『鎖結』、『魄睡』とそれぞれ書いた。
「これらは『鎖結（さけつ）』、『魄睡（はくすい）』と言う。霊力を有する魂魄が必ず有する器官の名じゃ」
筆を取って内容の筆記に取り掛かる悠璃と代わるように筆を置いた儂は、まず『鎖結』を指し示した。
「鎖結は霊圧の強弱を調整する役割を持つ。肉体で例えるなら、血の巡りの速さ、強さを担う心臓が最も近いと言えよう」

鎖結は、言葉にした通りの役割を持つ。これが失われれば死神は霊圧を扱う能力を喪う事になる。喩えるならそれは、呼吸をするための口を喪ったようなもの。あるいは血を巡らせる心臓を喪ったも同然。

部位としては胸の上部、喉のやや下部――鎖骨と胸骨が合わさる部分にそれは存在する。

「翻って、魄睡は霊力そのものを生み出す役割を持つ。肉体の血そのものを作る訳じゃな」

次に隣の用紙を指し示しながらそう説明した。

実際の肉体では人骨の中枢にある『骨髄』が血を作るので、正確な表現をするならそこまで言及すればいいだろうが、医学知識をまだ学んでいない悠璃にはまだ早いと考え、敢えて省いた。喩えはあくまで理解促進の材料に過ぎないからこれでいいだろう、と自己完結する。

ちなみに魄睡は胸の中央――心臓とほぼ同位置に存在している。

そう考えている間にも、悠璃は自身の用紙にいまの説明を素早く書いていく。

勤勉なようで大変よろしい。

「纏めると、強大な霊圧を持つには魄睡を、それを用いて強力な攻撃をするには鎖結を鍛えなければならん訳じゃ」

「なるほど……でも、霊圧の操作精度は……」

「個人の気質に依るが、概ね鎖結を鍛えると霊圧知覚は向上すると言われておるな」

操作精度とは、つまるところ量の調節に等しい。それを適切にしてやれば己の意に反したところに攻撃が飛んでいく事は無くなるからだ。

これは死神の基本戦闘術《鬼道》に最も関与する内容でもある。

鬼道は詠唱を必要とするが、それは自身の霊圧操作精度を言霊による付加価値で補っているから。無詠唱とは霊圧操作を極めて得意とする者が可能となる高等技術なのだ。強い霊圧を持つ者――隊長格が時に無詠唱を行うのも、鎖結と魄睡が共に自然強化されているに他ならない。

つまり隊長格級の霊圧を持つ者は、ある程度の無詠唱鬼道の行使が

知らない内に可能になっている。
　ただし上位鬼道は言霊を介し霊子を操ることを前提にするほどの大規模術式であるため、理論上は霊圧を極大まで上昇させれば無詠唱でも威力減衰を起こさないと言われるものの、そうもいかないのが実際のところである。
　それらを滔々と語る。
　途中から学院生が習うところをいくらか飛び越えている――無詠唱に関しては隊士すら知らない――内容になったが、悠璃にとっては難易度はどうでもいいらしく、意欲は衰えるどころか増すばかりの様子だ。用紙の上で踊る筆の速さがそれを表している。
「どうじゃ。わかったか？」
「はい！　――あ、でも質問！」
　ぴしっと学院生もかくやのきれいな挙手を見せてくる。時に教鞭を執る事がある身としては、家にいる筈が学院で講義を行っているような錯覚を抱き掛けてしまいそうだ。
　それを臆面にも出さず、なんじゃ、と問いかける。
「まずこの二つって戦闘で破壊されても治る？」
「否じゃ。原則、破壊されれば二度と治らんとされておる……まぁ、この二つだけを狙って破壊するというのは、瞼を閉じたまま針の孔に糸を通すようなものじゃがな」
　極めて高い霊圧知覚を持つ者なら霊力の源たる魄睡は感じられるかもしれないが、それを調整する鎖結に関しては感じられない筈だ。余程内心を揺さぶられていれば調整弁のそれの部位も感じられるかもしれないが……
　ともあれ、実質不可能な事には変わりない。
　そもそも魄睡は心臓と同位置にあるので、そこを壊された時点で死は確定したも同然である。
　そこまで答えると、納得した表情を悠璃は浮かべた。
　質問はまだあったようで、じゃあ次は、と言葉を続けた。
「ずっと前に、霊圧の増大は戦闘技術の反復と斬魄刀の解放って言ってた。この戦闘技術って《斬拳走鬼》だと思うんだけど……斬術と白

打に、霊圧がどう関わるの？　あとこの二つで霊圧って鍛えれるの？」
「うーむ……そうじゃな……」
　自分なりに教本を読み込み、解釈しているのだろう。だからこその質問に拾い子の成長を見た気がして感慨を感じながら儂は思考を回した。
「まず白打に関しては、霊圧を四肢へ集中的に回すことで肉体強化を図るために関係するのぅ」
　基礎霊圧が高まれば――つまり魂魄の体全てに濃密な霊圧が巡っている隊長格なら、意識せずとも高い身体能力を発揮し、また滅多な事では傷を負わなくなる。肉体強化とは、体の耐久面をも含んでいるのだ。
　だから岩を殴れば粉砕できるし、それで拳を痛める事もない。
　――つまるところ、白打は霊圧の強弱が如実に表れる。
　言霊による強化が含まれる鬼道に比べ、白打は小細工抜きの霊圧勝負になるためそこのところはより顕著と言えよう。斬魄刀を喪った時の緊急戦闘手段という趣きが強いためあまり見向きはされないし、虚を倒すのも本来は穢れを浄化し、輪廻に魂を戻すためなので、あまり対虚に於いて白打を使う事は推奨されない。
　とは言え、蔑ろにしていい訳でもないのも事実だ。
「次に斬術じゃが、これは幾つかある。単純なもので言えば斬魄刀の能力が鬼道系である場合じゃな。儂のもその一つじゃよ」
　炎熱系最強と謳われる儂の斬魄刀《流刃若火》は、自身の霊圧を猛火へと変換し、それによる攻撃を可能とする鬼道系斬魄刀である。刀としての切れ味に霊圧の炎を足した攻撃力を強みとする。しかしこれは消耗時に強みである炎を喪うものでもある。
　鬼道系斬魄刀は、本来の鬼道と違って詠唱の有無を問わないため、純粋に霊圧量がそのまま攻撃力となる。
　だから斬魄刀を用いた戦闘術《斬術》を実践するほど鎖結、魄睡は刺激されていき、霊圧量は増していく。今や最強最古となった儂も、その流れで全死神で最大の霊圧量を誇ったのだ。

「山爺すごい……あれ、でも他の人が鬼道系斬魄刀を持っても同じようになるんじゃ……？」
「それはそうなんじゃが、そもそも斬魄刀の解放……始解を行える者もあまりおらんからの。卍解に至っては現状儂を入れても片手で足りる程じゃよ」
斬魄刀の能力解放には二段階存在する。
一段階目は己の斬魄刀の完成に伴い、名を知る時である《始解》。
これには斬魄刀に宿った半身との対話と同調――一説では目的意識の認識、理解とも言われる――が必要となる。基本、刃禅を欠かさず行っていれば対話までは辿り着けるが、もう一つの同調は中々難しいものがあるとされる。
『他人のふり見て我がふり直せ』とも言うように、誰しも己の事をよく理解していない事が殆どなのだ。
そして斬魄刀の意志は、己の事を誰よりもよく知る存在。彼らの訴えには己に欠けているものを気付かせる意図が込められている事が少なくない。それに気付けるか否かが始解を行えるようになるかの分水嶺とも言える。
悠璃に斬魄刀を渡したのは、同調を為すために不可欠な対話において、己が半身から過去について聞けるかもしれぬと考えたが故だった。
本人はあまり気にしていない風だが――学院に通い出せば、悩むだろう。
その姿に半身が応えようとすることを願うばかりである。
そして、第二段階は《卍解》という。
これの会得には斬魄刀の意志本体の具象化、およびそれの屈服を要する。半身の姿を具現化させ、それに耐えられる霊圧と霊圧操作を有し、更に半身が提示する試練を乗り越えて実力を認めさせる必要があるのだ。
そして、護廷十三隊創設以来、未だこれを会得した者は全死神数千人の内たったの数人。儂と一番隊副隊長、それとほかの隊長格が何人かだ。

卍解は百年に一人しか会得出来ない――そんな話が流れる程に、席官級隊士にとっても至難の業として知られるようになった。
気付けば教本にもその一文が書かれるほどだ。
まぁ、元が荒くれ者の集いであるから、精神修行や自省などとは程遠い。時代が移ろうにつれて堅実に修行を行う者も増え、卍解習得者も多くなるだろうと儂は予想している。
尚、我が副隊長は一週間で習得したが、普通は数十年単位の修行を要する。隊長職に就いていながら未だ卍解を会得していない者も、そろそろ会得し得るだろう。
「――話が逸れたの。纏めると、直接攻撃型は強度と切れ味を上げるために霊力を込めるため、鬼道系は使うほどに霊力を消費するため、鎖結と魄睡を刺激する訳じゃ。鬼道系は直接攻撃型の場合に加えて鬼道分の霊力を消費すると考えれば、儂が高い霊圧を持つのも分かるじゃろう」
軌道修正を掛けた儂は、そう話を締めくくった。
一息入れるために少し温くなった茶をずず、と啜る。ここまで脇道に逸れてまで熱心に語ったのは久しぶりだなとふと思った。
「なるほど……でも、これだと戦闘訓練が出来る時にしか刺激できない……静かに出来る鍛錬方法って無い？」
「それこそ刃禅じゃよ」
「えっ」
三つ目の問いに答える。その内容が意外だったらしく、悠璃は驚いたように瞠目した。
気付いていなかったのか……と考えたところで、ふと気づく。
そういえば、教本で知識こそあるものの、霊力を意識して扱った事はないのではないだろうか、と。
「話は変わるが、悠璃よ、お主霊力を感じた事はあるか？」
その問いに、悠璃はぶんぶんと首を横に振った。
勢いにつられて靡く長い黒髪を見ながら、ふむぅ、と顎髭を撫でる。どこから話したものか。
「……霊力は、自らの魂魄から発せられる力。刃禅はそれを斬魄刀へ

効率よく流し、半身を宿させ、それを起こす手段なのじゃ。寝食を共にせよというのも普段から己の霊力を流すための文句に過ぎぬ」
感情の影響を強く受けるのは、魂魄が生み出す霊力にも何らかの気質が宿っているからと一説には考えられている。とかく気性の荒い者とそうでない者とを比較すれば分かりやすいので一定の信憑性はある話だ。
斬魄刀を目覚めさせるには、それも必要なのだろう。
そう考えた儂は、統学院の学生達がより己の斬魄刀を目覚めさせられるよう『寝食を共にし』という文言を付け加えた。共に練磨していく、という言葉でそこまで気は回らないだろうが。
「つまり、静かに行える鍛錬とは、瞑想に他ならぬ。まあそれも霊力を扱えればという但し書きが付くがの……今日刃禅を行う時に、斬魄刀へ流れる力に意識を傾けてみるといいじゃろう。それを感じ取ることが出来れば瞑想による鍛錬も十分可能になる筈じゃ」
何を隠そう、戦闘による霊圧増大に頭打ちが来て、更に総隊長としての執務で前線に行かない事が増えた儂は合間合間を縫って瞑想を行い、自らの霊力の流れを操作し、意図的に鎖結、魄睡を刺激している。
老いて尚最強を張れているのもコツコツと積み重ねた鍛錬故だ。
無論、それを広めぬ手はないと考えて瞑想鍛錬法を広めているのだが――再三になるが、護廷十三隊に属する隊士はほぼ全員が荒くれ者である。じっと体を動かさないでいる事が出来ない連中故、この鍛錬法は何十年も昔に途絶えて久しい。
儂としては、だから斬魄刀達が応えないのではと思う。
真剣に打ち込まぬ者に力を貸そうとは誰も思わないだろう。たとえ、それが誰よりも身近な存在であってもだ。
「むー……なんか、いっぱい難しい話ばっかりだったけど。ともあれ、ありがとうございました。早速刃禅して来ます！」
儂の内心を知る由もない悠璃は頭を下げて礼を言った後、素早くこの場を立ち去った。どたどたと二階を駆けあがる音を聞くに宣言通り刃禅を組み、霊力の流れを感じるつもりなのだろう。

「呵々(かか)。あの勤勉さの一分(いちぶ)でも、隊士達が見習ってくれればよいのじゃがなぁ」

それには、もっと時間を掛けねばならんじゃろうなぁ……と独(ひと)り言(ご)ちながら、冷めたお茶をずず、と啜った。

三話・元柳斎の養子（孫）、目を付けられる？（―約１９００年）

時は流れ、秋。
樹木が徐々に枯れると共に色とりどりの木の葉が見え始める時節になった。ここ尸魂界は現世・大和の四季を受けるため、植生もそれに準じている。
無論、それは食べ物に於いても同じだ。
「ほれ、悠璃よ、熱いから気を付けるのじゃぞ」
そう言いながら儂が差し出したのは一個の芋だ。薄紫色の皮に焦げ目をつけたそれの中身は綺麗な黄金色を見せており、ホカホカと湯気を立てながら、かぐわしい香りを目いっぱいに主張している。
ありがとう、という例と共にそれを受け取った悠璃は、あつあつっ、と言いながらもそれに齧り付く。
「ん――――……っ！」
途端くぐもった唸りを上げ、用意していた温めのお茶に口を付ける。熱せられた焼き芋を呑み下した悠璃は、ふぅ、と一息入れた。
コロコロとよく表情を変える子である。
「まったく忙しないのぅ、渡してすぐ食べるからじゃぞ」
「あふあふっ……でも熱い内に食べる方がおいしいし、醍醐味だって庭師のおっちゃんも言ってたから」
「それで口の中を火傷しては世話ないだろうに……」
この邸宅を管理する者達との交流も増えた悠璃は、彼らの言う事に耳を傾け、それを実践するという行動を最近は取ることが多い。今回もその類だと分かった儂は、向こう見ずな、と呆れてしまった。
口内を火傷するのは火を見るよりも明らかだろうに、なぜ痛い目を見てまでそれを実践しようとするのか。
――まあ、それも何となくわかっているが。
分かっているから、先の言葉以上の苦言は言わない。

様々な事に挑戦しているのも、おそらく何かが過去を思い出す手掛かりになると考えているからだ。それを妨げるのは良くないと思い、儂も必要以上には口出しをしないようにしている。

まぁ、あからさまに危険な行いは流石に言い聞かせているが……

「んに……でも、今度から口の中に霊圧回すから、大丈夫」

これである。

瞑想鍛錬法について教えてから程なく、刃禅を組む過程で霊力の流れを感じ取った悠璃は、儂が教えた鍛錬法で自ら鎖結、魄睡の鍛錬も行うようになった。それらが鍛えられるにつれ霊圧操作、知覚能力も向上しており、今では肉体の特定部位の強化を片手間に行えるようになっている。

それ影響故か、彼の霊力量は歴代の統学院入学生から卒業生の何れも超えている。

無論、経験を積んだ席官級隊士にはまだ劣っているが、これに斬魄刀の始解、卍解も残しているのだから末恐ろしく思うのを禁じ得ない。

「……火傷しないためだけに口内に霊力を集中させる者なぞ、初めて見たぞ」

「これも鍛錬の内と思えば関係ないない――――ん、おいひぃっ」

はぐりと残りの焼き芋に齧り付いた悠璃は、先ほどと打って変わってその熱さに苦悶する事無く、笑顔のまま咀嚼を続けている。どうやら本当に霊力を回して熱への耐性を上げたらしい。これで霊力操作が下手なものなら凝縮した霊力の壁――物理的圧力を伴った霊圧――で口内を覆ってしまい、味も解らなくなるところだろうが、悠璃はそんな失敗をしていない。それだけ細やかな操作を可能にするほど、彼の鎖結は鍛えられたという事だ。

護廷隊士のどれほどが同じ事を出来るだろうか。

そもそも霊力操作の向上――つまり、鎖結と魄睡の鍛錬は、以前話したように戦闘技術の反復が基本だ。その根底には霊力を使い果たすまで消耗し、鎖結、魄睡の活性化を促すという論理がある。これを効率よく行えるのが戦闘であり、瞑想鍛錬法はその代替案の位置づけ

だった。
だが――未だ始解は出来ず、鬼道も学んでいない悠璃には、瞑想こそが唯一真っ当な鍛錬法だ。
第一瞑想とは言うが、厳密に言えば『集中』でしかない。禅を組む必要も本来無いのだ。
だから何かをしながら霊力を操作する事も出来る。死神にとっては鬼道の詠唱であり、白打のために四肢に集める過程であり、瞬歩のために脚に集める過程であるそれは、悠璃にとっては日々の挙措になり得た。
戦闘活動と日常動作、どちらの頻度が高いかと言えば、たとえ死神であっても後者である。
日常動作での瞑想鍛錬を可能とした悠璃は、覚醒時は常に鍛錬を続けていると言っても過言ではない訳だ。四肢だけでなく、目や舌、指先といった小さな対象にすら霊力を込め、その調節すら自在になる程に。
している事は書類仕事をしながら瞑想鍛錬をしている儂と同じだ。
ただ、悠璃の場合はそれが細やかな技巧面に偏っていると言うべきか。学び始めれば鬼道の才を発露するやもしれぬ。
とは言え――儂は、鬼道を教えるつもりは毛頭ない。
まずは学院に入学することが大前提である。教本を貸しこそすれ、それらには鬼道の詠唱が一切ない事は把握済み。万が一にも鬼道を悠璃が習得する事はない。
妙なクセで怪我をしないよう斬術、白打、走術の三つはある程度教えたが、鬼道は原則誰が使っても効果は同じ。そちらは悠璃の成長に合わせて学ぶべきだと考えていた。
それを知ってか知らずか彼も鬼道の指導をねだってくる事は一度を除いてなかった。その一度も、興味を示して聞いてきたというだけだ。
危険性を承知しているのか、あるいは学院生の間は鬼道に没頭できるよう他三つの習熟を優先しているのか……
何にせよ、とても熱心な子である。

「――――む……」
そこで、儂の霊圧知覚に引っかかるものを覚え、芋を食べる手を止めた。
「……山爺？」
異変を感じ取ったか、悠璃がこちらを見上げてくるが、儂の視線は彼方を向いている。そちらから霊圧を感じ取ったのだ。
――獣のように荒々しく、だが研ぎ澄まされた殺意の霊圧を。
「お邪魔しますわ、総隊長」
間を置かず、その発生源が庭のただ中に現れた。
ギョッとした悠璃は、反射的にか傍らに立て掛けていた浅打を手に取り、抜刀の構えを取った。
「待て、悠璃。こやつは敵ではない」
「え……で、でもこの感覚は……」
儂の制止に、悠璃は戸惑いを露わにする。
儂が拾ってから数か月の間、邸宅に伝令の死神が顔を出す事もあり、幾度かは悠璃も儂以外の死神と対面した事はある。その何れも目の前の人物ほど荒々しい気配は発していなかった。
悠璃は困惑しているのだ。儂と斬術の鍛錬をしている時の空気を、目の前の人物が醸し出しているから。
なのに敵ではない――そう言われて、どうするべきか戸惑っている。
「――良い反応ですね」
儂がまた言葉を掛けるよりも先に、闖入者が言葉を発した。
闖入者は黒髪を長く垂らした女死神。隊長格である事を周囲に示す隊首羽織を死覇装の上から羽織っているため、この者が護廷十三隊のいずれかの隊長を務めている事は明らかだ。
いまは背中が見えないが――そこに書かれている字は【十一】。
護廷十三隊、十一番隊隊長を務める死神が闖入者の正体である。
女死神は視線を悠璃に定め、口を開いた。
「敵か味方か分からない。そんな存在を前に、咄嗟に警戒出来ている。不十分ではありますが及第点とは言えましょう」

そう続け、闖入者は僅かに口角を吊り上げた。
――ず、と周囲を圧する霊圧が放たれる。
「あ……う、くう……っ?!」
途端、悠璃の体が震えた。
「――止めよ」
間髪入れず割って入る。悠璃に向けられていた霊圧を受け止める事になったが、特に弊害は無かった。
――魂魄の戦いの大半は、霊力量が勝負を決する。
己が肉体、力の源である霊力が多ければ多いほど強くなる故に、その法則は絶対的だ。それに照らせば、隊長を務める女死神を前に悠璃が敵う道理もない。ただ霊力の圧――霊圧を向けられただけで、霊力の少ない魂魄はその存在を圧迫され、消耗していく。
軽ければ竦み、放心する程度だが、酷ければ呼吸困難にも陥り得る。最悪魂魄に重大な傷を付けかねない。
実のところ、隊長格が虚との戦いから遠い事務仕事に従事しがちなのも、守るべき魂魄を己の霊圧で傷つけないためという意図も含まれているのだ。
「いきなり何用じゃ。闖入して早々、威圧しおって……儂ら隊長格の戦闘に制限を掛けられる理由を忘れた訳ではあるまい、剣八よ」
何を考えてか、来て早々隊士でもない悠璃に霊圧を含んだ威圧を掛けた者――十一番隊隊長に、霊圧を返しながら問いを投げる。
それにあちらは、これはこれは、と痛痒にも感じないと言わんばかりの反応を見せた。
「申し訳ありません、総隊長。ただ、幾分物足りなく感じているところでして。僅かでも愉しめると思うとつい……」
にこやかにそう告げるが、しかし目はまったく笑っていない。
いつ斬りかかるかを思考し、だが立場を考えどうにか制止出来ている獣そのもの――この女死神の本性が見え隠れしていた。
十一番隊隊長、卯ノ花八千流。
護廷十三隊に於いて最大級の危険人物であり、元は尸魂界でも史上最悪と言っても過言ではないほどの殺しを行った大罪人。ただ強け

れば殺し合う。強いと聞けば、真実がどうであろうと殺しにかかる――そんな危険性を孕んだ女。
どれだけ取り繕っていようと、その眼の奥に込められた殺意だけは常に爛々と光っている。
その眼は、割り込んだ儂を見ているようで、その実、焦点は背後で震える幼子（おさなご）に当てられている。
おそらくここに来た目的も悠璃に興味を持ったからだろう。
「その子が噂の総隊長の拾い子なのですね。ずいぶんと大切にされているようで」
「……二言目には斬り合いを所望するお主が、興味を持つとは珍しいのぅ」
「それは総隊長の方でしょう。これまで尸魂界の守護、護廷の任務ばかりだった貴方に、よもや人の情が残っているとは驚きです。まして、団欒とは……」
ちら、と芋を焼いた枯れ葉の山を見た剣八は、今度こそ儂に意識を向けた。
「総隊長、私とて無暗に割って入るつもりはないのですが……私を蔑ろにされては困りますね」
そして、開かれた双眸が儂を睨む。瞳は底無しの闇を宿していた。
こやつの言う通り、無暗に割って入るつもりはないというのは本当だろう。それは良心の呵責だとか、良識の話ではなく、他者の団欒にいちいち意識を割く事にも価値を見出していないからだ。剣八は殺し合いのみに興味・関心を寄せる剣の鬼。
――そんな者を護廷十三隊に引き入れた時の条件がある。
かつて、護廷十三隊を結成する前の話だ。組織だってではないが、虚を浄化し、また現世の魂魄を守るための集まりは存在していた。それ護廷十三隊の前身とも言える。
ある程度の実力を持っていたその者達を、八千流は斬り殺して回っていた。
ただ殺し合うため。
そのためだけに何十、何百もの骸が築かれた。

これを問題視した尸魂界を統治する正一位（しょういちい）の貴族達が、虚討伐部隊――後の死神――に命令を下した。
その一人であった儂は、護廷十三隊結成に必要な実力者として八千流を認めていて、死闘の末に引き入れる事に成功する。
無論、八千流も最初は渋った。
八千流が殺し合いたいのは人／死神であり、虚ではない。虚しか相手にしない組織に身を置くことを奴は断固拒否した。
それでも頷かせたのは、護廷のために動く代わり、定期的に儂と殺し合うという契約を交わしたからだ。
霊力を操る者達の中で、八千流を下せたのは儂だけだった。〝数多のありとあらゆる剣術流派を我が手に収めた〟と自負し、自ら八千流と名乗っている奴にとって、敗北とはこれ以上ない新鮮なものだったに違いない。その魅力に憑りつかれた八千流は死神になる交換条件として『定期的に殺し合う事』を求めてきたのだ。敗北から学び、力を得ていく悦楽と、己より強い者を下す事への誘惑から、奴はいまも死神として動いている。
だからこそ、奴は不満を抱いた。
思い返せば悠璃を拾ってからの数か月の間、奴と刃を交えた記憶は無い。今までは月に一度くらいは交えていた事を考えればかなり期間が開いた方だ。
それを奴は責めてきているのだ。ともすれば、我慢できず悠璃にも斬りかかる――そう言外の脅しも込めて。
ふぅ、と短く、されど深くため息を零す。
「……悠璃よ、今夜は儂の帰りを待つ必要は無い故、早々に床に就くように」
「え……？　なん、で……」
「こやつは儂に用事があるようでの、それがかなり時間を要するものなのじゃ」
命のやり取りを将来行う死神になるとはいえ、死神同士で殺し合うなどとは考えていないだろう幼子にそのまま告げるのは酷だ。そう考えた儂は、詳細を暈して伝えた。

背後で地面に座り込んでいた悠璃が絶句する気配を感じ取る。
「――ん……わかった……行ってらっしゃい、山爺」
「やま――っ?!」
絶句からすぐ立ち直った悠璃は見送りの挨拶を口にした。
仮面のように張り付けた笑みを崩し、驚きを露わにする剣八を無視し、儂は軽く振り返って頷いた。
――間を置かず、瞬歩を発動
左手には斬魄刀を仕込んだ杖を、右手は驚愕で隙だらけの剣八の顔面を掴み、十一番隊のとりわけ広い修練場へ移動した。
着地する寸前に右手を離す。やや離れた位置で着地を取った剣八は、掴まれた事を気にしてないような表情でこちらを見てきた。
「……総隊長。普段、あのように呼ばれているのですか」
意外と思ったのか。あるいは呆れか。嘲笑か。
何れにせよ――額に、青筋が立った事実は変わらない。
「――構えよ、小娘。早々に片を付けてくれる」
杖から斬魄刀を解放し、それを構える。
剣八との死合は基本、始解、卍解はもちろん、鬼道もなし。純粋な剣術と白打の勝負になる。それがあ奴が定めた条件であるためだ。
それゆえ儂の刀から猛火が立ち上る事は無いが――代わりに、刀身に込める霊圧の陽炎が立ち上っていた。
「これはこれは……まるで、解放したかのような熱気ですね」
応じるように、剣八も己の斬魄刀を抜いた。通常の刀より強く弧を描いたそれの切っ先をこちらに向け、構えるのを見届ける。
――合図は無い。
ただ霊圧がぶつかり、空間が弾けたその瞬間、儂と剣八は同時に距離を詰めていた。

四話・元柳斎の養子（孫）、鍛えられる（―約１９００年）

秋が過ぎ、体の芯から冷える冬が来た。
しんしんと霊子の雪が降り積もる日々が続く中でも日々は絶えず過ぎていく。死神の仕事は年中無休で、家主たる男・山本元柳斎重國は殆ど居ない。一番隊隊長としてだけでなく、総隊長として貴族の集まりである《中央四十六室》とのやり取り業務もあり、普段から多忙を極めているためだ。
それでも夜になればこちらに帰ってくる。夕餉に間に合わずとも、就寝までには邸宅に戻ってきていた。
だがこちらに霊圧（あつ）を掛けてくる女性・卯ノ花八千流という十一番隊隊長が来た日は夜遅くになっても帰って来ない。流石に日を跨ぐ頃になったら帰ってくるが、そういう時の山爺は大体疲れ果てていた。何をしているのかと聞いた事はあるが仕事だ用事だの一点張りで具体的に教えてもらった事は無い。あまり触れない方がいいのかなと思い、それ以上は触れないようにしている。
そんな日々を過ごしながら、俺は死神統学院の入学を目標に勉学と鍛錬に励んでいた。
「――悠璃、おはよう。いま良いかの」
「山爺？　うん、模写をしてただけだから大丈夫だけど」
だが、とある日は違った。お湯を入れた革製の袋――湯たんぽと言うらしい――を抱えながら、今日も今日とて書字に勤しんでいた時、山爺からお呼びが掛かった。
今は朝食に呼ばれるまでのわずかな時間。いつもなら朝食の席で顔を合わせるのに、わざわざ珍しいと思いながら山爺を出迎えた。
「まず、明けましておめでとうじゃな」
既に死覇装、隊首羽織姿の山爺は、いきなりそんな挨拶を告げてきた。

それに聞き覚えがあるような無いような――奇妙な感覚に囚われながらも、少なくともどういう意味かよく分からない俺は首を傾げる。おめでとう、と祝う言葉だから悪い意味ではないのだろうが……

この反応で意味を理解できていないと分かったらしい山爺は、新年を迎えた時にする挨拶なのだと教えてくれた。どうやら一年を十二等分した月日が一巡りし、今日がその最初の日のため、それを迎える事への祝いの言葉を友人知人にしていく事が礼儀になっているらしい。

それを聞いた俺も挨拶を返すと、山爺は満足げに頷いた。

「それと、渡す物もあってな」

そう言った山爺が懐から取り出したのは小綺麗な白い紙袋だった。

「新年を迎えた時、大人は子供に小遣いを渡すそうじゃ。これで好きな物を買うといいじゃろう」

どうやら新年祝いのお金らしい。受け取った紙袋の感触からするに、それなりの額の貨幣が入っている事が分かった。

「ありがとう、山爺」

「うむ」

素直に嬉しくて、お礼を言う。また満足げに山爺が頷いたところで、階下から俺達を呼ぶ声が聞こえた。どうやら朝食の支度が済んだらしい。

いったんお金の入った袋を部屋の卓上に置いた後、俺は山爺と一緒に食卓に向かった。

＊

朝食後、山爺が隊舎へ向かうのに合わせて俺も邸宅を出る。

尸魂界は凡そ三つの地域に区画分け出来る。

一つ目は《瀞霊廷》。貴族や死神の住居区が存在する場所で、この尸魂界の中心地に存在している。巨大な崖を囲うように展開された構造物のどこかに隊首会を開く場所があると聞いたので、護廷十三隊の拠点である事は明白だ。

二つ目は《流魂街》。死者の魂魄が暮らす場所で、東西南北の四方それぞれ１～８０までの地区に区分されている。この地区の数字が小

さいほど治安が良く、商業施設なども発展しているという。逆に数字が大きいほど治安が悪く殺人、窃盗などが横行しており、非常に危険だと聞いた。

そして最後は『それ以外』。森や荒野など、およそ人が暮らしていない無人の地域である。考えようによっては流魂街８０地区の範囲になるのかもしれないが、時々虚が現れて非常に危険なので、余程腕に自信のある荒くれ者でなければ森に踏み入らないため無人地域になっているという。

ちなみに俺が目覚め、山爺に拾われたのもここだ。

そして、いま俺がいるのは流魂街１地区。

瀞霊廷の端に沿うように並ぶ１地区の商業施設を、俺は時間を掛けて歩いて回った。東西南北すべての店を回っていいものが無いか冷やかすのも中々楽しい。歩く距離はかなりのものだが、足に霊力を込めて歩く鍛錬だと思えばそう苦でもない。足が疲れにくくなるから疲労自体少なかった。

「んー……なにか無いかなぁ……」

霊力を使ってお腹が空いては買い食いをして、それからまた商店巡りを再開した俺は、どうしたものかとふと足を止めた。

――正直、買いたいと思うモノが無いのだ。

あまり食べ過ぎては昼食、夕食に差し支える。それに食べ物もほとんど肉にタレを掛けて焼いたものばかりですぐ飽きてしまう。

服の替えは用意してもらってるもので事足りているから無し。着飾るのも、興味は無い。

筆や硯（すずり）も山爺が予備のものをくれるのでわざわざ買う必要がない。

どうしたものかと悩みながら歩き続けること暫く。

「――本、か」

俺が唯一興味を持ったのは、大きな本屋だった。

大店（おおだな）であろうそこの蔵書量は途轍もない筈で、これなら家でも読んでない本を見つけられると思った。家では山爺から読んでいいもの、いけないものを分けられていたし、ほぼ全て教本だけだったから他にどんな本があるのか俺は知らない。

何があるかとワクワクしながら、俺は本屋の敷居を跨いだ。
＊＊＊
「おかえり山爺！　それと見てこれ見てこれ！　今日買い物に出かけたら、本屋で凄いの見つけた！」
新年の夜。
隊士達とも新年のあいさつを交わし、常と変わらない業務を済ませ、帰途についた儂を出迎えたのは非常に興奮した様子の悠璃だった。ここまで喜びを露わにするのはかなり珍しく、思わず面食らってしまった。
こちらの様子に頓着した様子もなく突き出してきたのは、一冊の本だった。
「初級鬼道の心得、じゃと……？」
思わず目を見開いた。
それは悠璃がせめて統学院に入学するまで教えないようにと思い、彼の目の届かないところに隔離した本の一つだったからだ。
なぜ鬼道を教えないのか。それは統学院で必要なものを学べるため、今は斬術、白打、走術の三つを習熟した方がいいと考えたからだ。とは言え悠璃にそれを語った事はないため、今まで見た事が無い本を見て興奮し、衝動的にそれを買ってしまったのだろう。
これは厄介な事になったやもしれぬ、と内心で唸りを上げた。
ここまで興奮し、喜んでいる様子からおそらくこの本を取り上げる事は敵わない。それで他の鍛錬への意欲を損なっては本末転倒だ。
「山爺、これで鬼道の鍛錬していい？」
思った通り、悠璃の興味は既に鬼道に向いている。なんなら明日から――いや、静かなものを選んで今夜からでも鍛錬を始めるかもしれない。
「待つのじゃ。鬼道の鍛錬をする前に、一つ試験をするぞ。これに合格すれば指定した番号の鬼道に限り鍛錬を許可する」
「わかった！」
こうなっては仕方ないと、妥協案で納得する事にした。
鬼道は攻撃用の『破道』、補助の『縛道』で九十九種類ずつ存在する。

それらを一つずつ慣れていくにしても、詠唱を覚え、言霊に霊力を込め、適切に発動する――その全ての段階に習熟すると考えれば、時間はどれだけあっても足りない。元々教えないと決めていた理由は、鬼道は他の三つ以上に繊細な調節を必要とし、習熟にとても時間を要するからなのだ。

――逆に言えば、他が既に高水準であれば問題ないのだ。

「斬術、白打、走術の全てを使い、儂に一撃当てる事。それが試験じゃ」

「……えっ」

試験の内容を告げた途端、さぁっ、と悠璃の顔から血の気が引いた。

＊

その夜から、儂と悠璃の一騎打ちが始まった。

たった一撃当てるだけ。

言うは易く行うは難し事だ。伊達に荒くれ者どもを束ねる総隊長を務めていない。儂に従うことをよしとしない者、あるいは儂を下す事に執着する者も少なくなく、それらを返り討ちにしてきた儂を捉えるのはそれだけで高い実力を必要とする。

それを考えれば、悠璃はまだまだ実力が足りていない。

経験が足りない。

霊力が足りない。

そもそも、素地となる能力が足りていない。

何もかも足りていない悠璃には無理難題。無論、儂はそれを理解している。そうと分かっていながらその条件を提示したのは、三つの能力を実戦で鍛えるためだった。

命の危機に瀕した魂魄は、動けないほど消耗するか、あるいは奮起して急に霊力を高めるかのどちらかの反応を示す。ある程度の力を持っている者ほど後者に傾く傾向にあると経験則で学んでいた儂はそれを意図的に起こそうと考えた。

食らいついてくるなら御の字。入学前に霊圧をより高め、高水準の技術を身に付け、一撃当てれば鬼道も習得できる。

だがここで諦めても構わないと儂は思っていた。〝入学前に鬼道を学べるか否か〟を賭けた試験でしかないからこの応酬は悠璃が入

学すれば不要なものになる。
まぁ、おそらくすぐに音を上げるだろう。自分が課す鍛錬をやり遂げた者はほぼいないからだ。
そう思っていたのだが。
思いの外、悠璃は粘り強かった。
「――参るッ!!!」
自身を奮い立たせるためだろう気迫の籠った声を上げた悠璃が地を蹴った。空気を切り裂く音は瞬歩のそれ。幾度となく試験を繰り返す内に悠璃は儂の瞬歩を見様見真似で体得していた。
瞬足で迫る黒き幼子が、腰だめに構えた刀を抜刀する。
真っ向から儂の斬魄刀で迎え撃ち、刃を合わせる――寸前。あちらの刀が煙(けぶ)り、立ち消えた。
一瞬後、軌道を変えた悠璃の刀が真下から迫り来た。
「ぬっ――」
すぐさま斬魄刀を引き、刃を防ぐ。ぎゃりり、と火花が散った。
それから間を置かず悠璃が距離を取る。鍔迫り合いでは、力も霊圧も劣る自身が不利だと理解している故、速さと奇策を手札に挑んできているが故の行動。
――本当に、粘り強い。
距離を開ける幼子を見送りながら、幾度とも知れぬ所感を内心で呟く。
最初は全て躱し、往なせていたが、試験も二十を繰り返した頃から徐々に防がなければならない攻撃が増えてきた。
力も速さも、そして読み合いも稚拙ではある。
だが――たしかに、成長している。
席官級にはまだ届かないだろうが、並の隊士であれば先の攻撃で頸を断たれていたに違いない。
「……気配の殺し方が上手くなったのぅ」
それは素直な賞賛だった。
隠密にはまだ足りないが、攻防の最中にふっと一瞬気を反らす程度は出来てきている。それを儂にも通用するほどに習得しているとな

れば褒めない訳にもいかない。
だが、気掛かりなのは儂はそれを教えた覚えが無い点だ。
「誰から教わったのじゃ？」
「強いて言うなら、剣八さんかも。山爺に会いに来るときの剣八さんはいつ来たか分からないくらい静かだから」
「……そうか」
その返答を聞いた儂は、内心でまた唸った。
十一番隊隊長・卯ノ花八千流。またの名を『剣八』。〝幾度斬り殺されても絶対に殺されない〟という噂を体現したあの女は、勝負を吹っ掛けに来たあの日から数日に一度の頻度で儂の下を訪れるようになった。それが狙ったように儂の休日と重なっていたのは儂への仕返しも兼ねているだろう。
何れにせよ確かなのは、あ奴に悠璃が感化され、技量を高め始めているという事。
本来なら学ぶべきでない相手なのだが、如何せん悠璃に必要な技量を全て揃えてしまっている剣八から学び取るのは理屈の上では間違っていない。ただ剣八の人間性を考慮すると間違いになってしまうだけなのだ。
止める事も叱る事も道理ではないと判断し、儂はそれ以上追及しなかった。
――代わりに、内心で燃え上がるものがあった。
それは、こ奴を鍛えるのは儂だ、という忘れて久しい師範としての熱。
八千流――数多のありとあらゆる剣術流派を我が手に収めたと自負したあ奴は、その自負の通り、無数の剣術を以て敵を圧倒する戦法を得意とする。白打も出来ないではないが、基本は斬術と走術に偏っていた。言わば剣に魅入られた獣があ奴の本性。
それは儂とて同じだ。
剣八と違うのは、あ奴が殺し合う事に意義を見出したのに対し、儂は活かし合う事に意義を見出した点。剣八は数多の一を束ねた剣士だが、儂は極限の一を皆に広める剣士だった。

……おそらくだが。
あ奴は、悠璃に潜在する力に目を付け、己の技術を引き金に大成させようと考えている。それが実ろうが実るまいが関係なく、自身が愉しめるかもしれない――そう考えたから実行に移している。
それが儂は気に喰わない。
儂が興した『元流』の門下生ではない。しかし、死神としての教え子ではある。悠璃をお前のような殺し合いのみを求める獣にはさせぬ、儂が鍛え上げるという熱意が燃え上がっていた。
どちらにせよ、悠璃は強くなるだろう。
その果てに他者を喰らう獣になるか、他者を活かす人になるかは、儂に掛かっている。
「――残り四半時（しはんとき）2時間の4分の1。30分の事じゃ。さぁ、来い」
「ッ――――！」
応（いら）えは無い。
その代わりに聞こえたのは裂帛の呼気。瞬歩で距離を詰め、時に離して攪乱し、儂の意識の間隙を縫って刃を届かせようと迫る。
それを儂は、斬術だけで凌いでいった。
――第二十一試験目、制限時間で失格

五話・元柳斎の養子（孫）、合格する（―約１９００年）

山本元柳斎重國。

『元流』の開祖にして総師範。護廷十三隊、死神統学院など、尸魂界の歴史に於いて必ずその名を聞く功績を残した男は、その実、大罪人である私をして恐れを抱くほどの苛烈さと冷酷さを兼ね備えた死神だ。

敵対した者はたとえ命乞いをしようが容赦はしない。護廷創立当初、彼に反感を抱いて叛逆した者達がいたが、それらは全て彼の一刀の下に焼き払われている。

全ては護廷のために。

世界の秩序と存在の均衡を維持するために。

それを妨げる存在を、あの男は遍く滅してきた。

かつて大罪人とされた私が生きているのは、人を統べる力を欲していたからに他ならない。

――あくまで〝統べる力〟である点に、私が採用された核心がある

設立当初は護廷とは名ばかりの殺戮集団として霊力なき魂魄に恐れられていた。それほど気性の荒い者達を統一するには、彼らを圧倒する力――挑む事すら考えさせない畏怖の象徴を据える事が最善だった。

元柳斎がその座に就く事も出来ただろう。

だが――〝総隊長〟という立場に就くには、その印象は不適格過ぎる。死神になり得る魂魄はなにも荒々しい者ばかりでないからだ。そもそもそんな恐ろしい存在を貴族が認める筈もない。

そこで私に目を付けた。

剣術のみで高位の霊力保持者を殺し続けてきた私の存在は既に周知されており、護廷設立前後で挑んでくる実力者は元柳斎を除いていなかった。

そして、その一戦で私は敗北した。

――生まれて初めて敗北を喫した

そのとき抱いたものの名は定かではない。屈辱か、喜悦か、どちらとも言えぬ複雑なそれを、しかし私は不快には思っていなかった。

一つ確かなのは、まだ私は強くなれる――その思考が浮かんだ事だ。

故に、私は元柳斎に条件を持ち掛けた。彼が設立する組織に属し、荒々しい者共を一手に引き受け扱く代わりに、定期的に手合わせする事を。

大罪人を引き入れるにあたって貴族達と揉めた可能性は高いが、そこは私の関知するところではない。

ともあれ、そんな経緯で護廷十三隊・十一番隊隊長を務めはじめて百余年。

定期的に死合を交わしつつ、着実に強くなっている実感を抱きながら日々を過ごしていた私は、最近になって別種の驚愕を抱く事になった。

総隊長が子供を引き取った。

初めてその話を聞いた時、私は耳を疑った。

話を聞く限り、一番隊隊士の持ち回りだった警邏地で拾ったらしい。最初は虚の出現を憂慮して一時的に保護したのだと考えた。その後子供は割り当てられた流魂街へ送られるのだろうと、そう予想し、その日は意識の外に放り出した。

だが、暫く経っても同じような噂が流れてくる。

同じ内容かと思えば実は違う。拾っただけならまだしも、引き取った――つまり、家族として受け入れたと意味するその噂に、私は耳を疑ったのだ。

よもやあの苛烈な男に、他者を家族として引き入れる情があるなどとは驚きだ。

――とはいえ、私には関係ない事だと、すぐにまた思考の外に放り捨てた。

それが翻ったのは半月が経ってからだ。

常であれば月に一度の頻度で死合を行っていた。私から声をかける事もあれば、仕事の都合であちらから言ってくる事もあり、その辺

は互いの不文律だった。とは言え総隊長に比べればこちらの方が業務の余裕はあったため、大抵はあちらの都合に合わせ、声を掛けられるのを待っていた。

だが、待てど暮らせど元柳斎は来ない。

数か月待っても一度も声を掛けに来ない状況に際し、そこまで総隊長としての業務が忙しいのかと疑問に思い、噂をかき集めていけば――何たることか、拾った子供と過ごしているという。滅多に休暇を取らない総隊長が高頻度でそれを取り、邸宅で過ごしているのだと。

さすがに我慢の限界だった私は殺意の霊圧を放ちながら元柳斎の邸宅に向かった。

――その時があの子供と初めて会った瞬間だ

霊力があるのは分かる。とは言え、それは隊士から感じたものと同程度。傍らに浅打がある事に疑問はあったが、死神になる以前の私も適当に死体から奪っていたから似たようなものだろうと考えた。

その邂逅以後、私と子供の関係は〝ただの知人〟に過ぎない。

数か月の空白を埋めるように邸宅に押しかけ、問答無用で元柳斎を引っ張り出す時に顔を合わせるくらいだ。私の霊圧を感じ取って素早く元柳斎も出てくるので彼とは数言話した程度。

初対面時に霊圧で威圧したせいか最初は警戒してきていたが、それも徐々に解け、私の気配の消し方を真似ようとまでしている。

元柳斎から私の危険性を聞いているかは定かではないが、もし聞いているのだとすれば、あの少年は一般隊士達よりよっぽど肝が据わっている。

「……本当に、恐れ知らずな子です」

目を眇め、呟く。

霊圧も気配も消した私は眼下で展開される試合を注視していた。夜半、月が昇ってから総隊長と山本悠璃は人気のない荒野へ赴き、およそ一刻ほど斬り結ぶのだ。

ほぼ毎日行われているそれは悠璃を鍛えるためのものらしい。

明らかに総隊長は手加減している。白打も走術も使わず、純粋な斬術のみで応じているのがその証左。反面、少年の方はその三つを全力

で使っている。
その霊圧を感じ取り、様子を見に来てみればこれだ。こんな事をしていたのかと少し驚いた。
それに、あの子供が瞬歩すら使えるとは思っていなかった。
「総隊長が教えたのか、はたまた見て学んだか……」
総隊長が瞬歩をこの試合で使っている様子は無い。つまり見て学んだとすれば、私と死合に行く時か。ただ見送っているだけかと思っていたが、もし見様見真似で使えるようになったとすればその時しか思いつかない。
途方もない才能があるのか。あるいは、純粋に霊圧操作能力が高いのか。
「――っ！」
――そこまで考えた時、目を瞠る事が起きた。
子供が刀を振り下ろした。
元柳斎は一歩後退してそれを避けたが――問題は、そこではない。刀の切っ先から輝く霊力が飛び、死覇装に切り傷を与えたのだ。
ただの剣圧ではない。
あれは相応の霊圧を有し、且つそれを操る能力に長けている者にしか出来ない霊力を伴った遠当て。凝縮するほど物理的な圧力を伴う霊圧を束ね、斬撃として飛ばす技だ。それは席官級以上の隊士なら可能な技術だが、かなり消耗するためわざわざ誰かに教える事はしない。よしんば教えるにしても、それは霊力を放出する鬼道系斬魄刀の持ち主同士に限られる。
あの少年はまず間違いなく斬魄刀の解放を可能としていない。
つまり総隊長から教わる事無く、自力であの遠当てを体得した推論が浮かび上がる。
「――どうであれ、成長が楽しみですね」
最初は愉しい死合相手を奪う者だと思っていたが――ともすれば、三人目一人目は元柳斎、二人目は少年時代の更木剣八、悠璃は三人目になり得るかもしれない。
そう考えを改めた私は、帰路に就く二人を追うように隊舎の自室へ

瞬歩で引き上げた。
＊
　時は移り、翌日。
　その日すべき最低限の業務を終えた私は、足早に一番隊隊舎まで足を運んでいた。廊下ですれ違う隊士達から恐怖の視線を向けられるが、それを無視し、隊首室まで移動する。
「総隊長、少しよろしいですか？」
「――開いておる」
「では失礼します」
　隊士達に向けるものとは毛色の違う乱暴な返答を聞き、私はすぐに隊首室の扉を開けて入室した。
　総隊長は執務机で書類を片付けていたが、私が入ってくるなりそれを脇に寄せ、警戒しながらこちらを睨み付けてくる。
「何用じゃ。死合なら一昨日にしたであろう」
「今日はその事で参った訳ではありませんよ。あなたが拾った子供……山本悠璃について、お話があるのです」
「儂には無い。帰れ」
　にべもなく突っ返される。表情は険しさを増し、滲み出る霊圧に怒りが混じり始めているのを見て、相当あの子供を大切にしている事が窺えた。
「私を危険視している事は重々承知ですが、私とて剣士の端くれ。才ある者を見た時の衝動はあなたにも理解できるはずです」
「貴様と儂が同じとでも言いたいか」
「ええ」
「笑止。貴様は奪い殺す者、儂は活かし教える者じゃ。貴様なぞに関わらせるとロクな事にならんのは目に見えておる」
　最早話す事は無いと言わんばかりに、脇に追いやっていた書類を手元に戻し始める総隊長。
　その姿に、これはこれは、と内心で関心を抱く。
「私はまだ用件を申し上げていないのですが」
「戯けが。大方悠璃に剣を指南しようとでも言いたいのじゃろう」

「剣だけではありませんよ。斬拳走鬼、すべて指南するつもりです」
「……なに？」
そこで、ぴたりと総隊長が動きを止め、怪訝な目を向けてきた。
「……貴様、何を企んでおる」
「それを答える前に、総隊長、なぜ試合でずっと鬼道を使わないのです？」
「……気付いておったのか」
「当たり前です。私の探知能力を侮らないでください……それで、何故です？　見つかりたくないなら〝倒山晶（とうざんしょう）四角すいを逆さにした形で、周囲から中が見えない霊圧の結界を出現させる〟を用いればよかったでしょう。あなたなら、周囲に霊圧を漏らさないよう手を加える事も容易い筈です」
縛道の七十三・倒山晶は視覚を騙すだけで霊圧知覚までは騙せない。だが鬼道を編み出し、それを体系化したのは総隊長自身だ。霊圧知覚を騙す縛道を編み出している以上、それらを掛け合わせる事も不可能ではない。
それは総隊長も理解している筈だが、その上で使っていないのだとすれば、理由は自ずと絞られてくる。
「まぁ、答えは想像が付いています。大方あの子供に鬼道を使うのを見せたくないのでしょう？」
「……」
「沈黙は肯定と捉えますよ」
押し黙った男に、相変わらず分かりやすい人だと思う。苛烈、冷酷――思慮が浅いとは言わないが、しかし直情的なきらいがあるこの男の考えはとても読みやすい。加えて、決めれば中々意見を翻さない。
今後頑迷な思考にならないかが気掛かりだが――まぁ、そんな事はどうでもいい。
「なぜ総隊長が鬼道を見せたがらないのかは知りませんが、既に霊圧による遠当てが出来るのです。鬼道を扱う条件は満たしています。加えて斬魄刀を渡している時点で死神になろうとしているのは明白、今から習得しても問題ないと思いますが」

「うむ……それはそうじゃが、鬼道は霊圧を込め過ぎると暴発するじゃろう。儂が居ない時にそうなってはな……」
つまり、自分の見ていないトコで滅多な事をしないで欲しい、と。そう考え、鬼道を教えていないし、目の前で使っていないらしい。
ともすれば鬼道の存在自体教えられていないのか……
「……でしたら、回道(かいどう)回復、治療用の鬼道。霊力の性質に左右されるため才能のある者にしか使えない。原作花太郎曰く、四番隊に属さない隊士は戦闘用霊力の持ち主が多いとのことであればいいのでは？」
「儂はほぼ使えぬから無理じゃな」
そう首を振った総隊長は、机に立て掛けた杖に目を向ける。内包されている斬魄刀〝流刃若火〟の霊力の特性は〝熱〟。故に総隊長は炎系統の鬼道に極めて高い素質を持つが、水や氷はあまり得意ではない。回道は正にその水系統の鬼道に多く属しているので同様に不得意のようだ。
「それなら私が教えましょう」
「なに？」
「私の斬魄刀をお忘れですか？」
「……そうであったな」
総隊長は唸りながら眉根を寄せる。
私の斬魄刀の名は【肉雫(みなづき)☒】。尸魂界に現存する斬魄刀で唯一の生物型であり、解放すれば巨大な浮遊する魚へと変化する。それの体内には治癒能力効果があり、怪我をした者を飲み込ませ、治癒と共に吐き出させる事で継続的な回復が可能な斬魄刀だ。生物型、また治癒能力それぞれで現状唯一の斬魄刀。
これの持ち主であると知ったある人物麒麟寺　天示郎のこと。リーゼントで煙管を加えたチンピラのような男で、治癒に関する事は他の追随を許さない腕を持つから回道を教わった事もある。
――つまり私は、あの少年に回道を教えられる訳だ。
その一連の経緯を斬魄刀から思い出したらしい総隊長は、しかし、と更に険しい表情を浮かべる。
「はぁ……それほどまでに私の事を警戒するのでしたら、ここで約束

致しましょうか？　あの子供と死合いはしないと」
「……悠璃が望んだら、じゃ。それと斬術、白打は儂で間に合っておる」
「ええ、それで十分です」
苦渋の末、総隊長はそう答えた。
私はその答えに満足し、今回の交渉はこちらの勝利だと会心の笑みを浮かべながら部屋を退出。まだあの子供が受け入れるかは分からないが――あれほど貪欲に力を付けようと足掻き、元柳斎に挑むのであれば、必ず食いつくだろうと確信していた。
――数日後。
「よろしくお願いします！」
「ええ、どうぞよろしく。あなたが死なないよう鍛えて差し上げます。まずは回道習得に向けて、基本的な霊力操作から始めましょう」
つい先日に放った霊圧を受けても怯む様子が無い少年は、私に師事してきていた。
――直接的な戦闘行為は禁じられた関係だが、まぁいい。
回道を使えるようになれば自ずと戦死はしにくくなる。そうして強くなっていけば、いずれ死合える時が来るだろう。
元柳斎、そして強くなった悠璃と死合った私はかつてより強くなる筈だ。
――ああ、愉しみだ。
かつて、私は真に相応しい〝剣八〟を私の不甲斐なさのせいで弱くしてしまった。その過去を振り払い、殺し合う――その未来を思うと喜悦が止まらなかった。

六話・元柳斎の養子（孫）、変革を齎す（―約１８９９年）

「……今頃は入学式ですかね」

月日は過ぎ、春。

桜の木々が芽吹き、瀞霊廷のそこかしこで桃色の花びらが舞う今日、死神統学院の入学式が行われている。そこに自身の教え子が入ると考え、隊長室の窓から学院の校舎に視線を投げた。

全死神で最強の総隊長の拾い子、山本悠璃の成長は著しい。

意欲は高く、素質も上々。中でも特筆すべきはその記憶力。その眼で見たものに限られはするが、一度目にした技術は決して忘れない。そこに辿り着くまでに必要な知識と技術が集まれば自力で習得する――それは、類稀なる才能と言っても過言ではない。

惜しむらくは私の剣術を授けられなかった事だろう。

彼が師事してから約三ヵ月、私は走術と鬼道を中心に指南した。

他者の霊力を鋭敏に感じるらしい彼は総隊長の瞬歩を真似したらしく、霊力の調整を助言する程度だったため、特に力を入れたのは回道だ。

回道には先天的な才能を必要とすると統学院で習うが、厳密に言えばそれは違う。他者の霊力、および霊子構造をも把握する高度な霊圧知覚能力を持っている者だけが、他者を癒す回道を扱える。つまり後天的に習得する事も不可能ではない。

そもそも尸魂界に存在する全ては《霊子》で構成されている。

この霊子と霊力は似て異なるものだ。

有体に言えば、前者は構造物を形作るもの、後者は不可視の力場である。これらはまったく同じものではない。

――しかし、同じものにはなり得る。

これを証明しているのは鬼道だ。破道、縛道の中には物質的なものを作り出す術も存在する。鬼道の行使に霊力を用い、霊子構造物を作

り出している――そう考えればこの話はおかしなものではない。
尸魂界に《器子》の構造物である物質は存在しない。あるのは全て、霊的なものである。
魂魄は自らの霊力で体を構成する。つまり、霊力で霊子は作り出せる。回道は対象の霊子構造に合わせて己の霊力を練り上げ、補完する技術なのだ。故に霊圧知覚の高い者でなければ扱えない。
つまり本来魂魄となった存在に霊力を持たない者は居ない。霊力を体外に出す調整弁《鎖結》や霊力を自力で生み出す《魄睡》を持たない者を、十把一絡げに『霊力を持たない』と言っているだけなのだ。
これらを知らない死神は非常に多い。自分達が扱っている破道、縛道の中で物質的なものを作り出す時、なぜそれが現出しているかを考えない。そこまでを教える教師も少ない。そして使えさえすればいいからそれを隊長格もわざわざ訂正しない。
「これでは救護班が増えないのも当然です」
ふぅ、と息を吐く。
護廷十三隊の中でも好戦的な者ばかりが集まる十一番隊は、他の隊士――特に、救護・治療に特化した四番隊隊士を見下す傾向にある。
四番隊は心優しい隊士が多い。他者に共感する感性が、結果的に他者の霊子構造を把握する知覚能力に貢献しているためだと私は推察している。しかしその隊は霊圧が低く、戦闘能力も低い。それを我が隊士はあげつらっていた。
私自身はこの現状を嘆いている。
戦闘に於いて力が無ければ戦死する。死んでは元も子もない故、私ですら回道を会得した。他のどの隊よりも戦線に赴く事が多い十一番隊は必然的に怪我をする機会が増える以上、四番隊とは切っても切れぬ関係にあるのだ。
――手元の書類を見る
四番隊隊長、副隊長以下、席官を含む連名での苦情だ。
他の隊への苦情をはじめ、何かしらのやり取りが発生する場合は一度総隊長を通す事が定められている。総隊長が全体を見てその是非を決め、却下するか対象の隊に書類を通すか決めるのだ。これがここ

にあるという事は、つまり総隊長もどうにかしろと考えているという事だ。
「ふむ……一案、練ってみましょうか」
窓の外――彼方に見える建造物を見やってから、筆を取った。
＊＊＊
悠璃が統学院に入ったその日の昼下がり。
昼食を済ませた儂は、昼一番に隊長室に足を運んできた十一番隊隊長・卯ノ花八千流と対峙していた。視線は手渡された書類――四番隊からの苦情に対する対応案の部分に固定されている。
「……貴様、正気か？」
「私はいつでも正気です」
間髪入れずの返答。こやつの気が触れた時の事など考えたくもない。現状それが起き得る事態も無いから、その答えが返ってくる事も予想済みだ。
だからこそ、疲れるのだが。
――書類には対応案が二つ書かれている。
一つ目は四番隊に卯ノ花八千流が移籍する事。回道の技術体系化を為した人物から直接指導された一人であるこやつは、四番隊に属する条件を十二分に満たしている。十一番隊を統べていた者が四番隊に移れば確かに直近の問題は解決できるだろう。
護廷を設立して百余年。当初に比べれば狂暴性もやや収まった故、無理に十一番隊隊長を卯ノ花が務める必要は無くなったと言えよう。
無論移籍した後しばらくは暴れるかもしれぬが……
その時のための対応案が二つ目。
それは〝剣八〟の名の世襲だった。
〝剣八〟は卯ノ花自身が名乗り始めた二つ名だ。幾度斬り殺されても絶対に倒れない――その畏怖を体現したあだ名。今でこそ回道を使っているが、護廷に入る前は傷だらけのまま立ち向かっていた。この名は大罪人時代の畏怖を体現したものでもある。
それを十一番隊隊長に継がせていくと言うのだ。
尸魂界に於いて空前絶後の大罪人のあだ名を継承させる。ある意

味、歴史の汚点を残していくようなものだ。
本来であればそんな事を受け入れる者は居ない――
「総隊長も分かっている筈です。我が隊の隊士達は、己を脚色する異名に強く執着しています。これを拒否する者は居ないでしょう」
「……じゃろうな」
そう、本来であれば。
しかし十一番隊は護廷きっての荒くれ集団。卯ノ花が言ったように、異名を持つ事に執着を見せる。喧嘩など茶飯事のあそこでは名が売れる事こそ強さの証明の一つになると信じられているのだ。
その思考を理解していたからこそ、儂は卯ノ花をその者達の隊長に据えた。
理に適っていると言えよう。
更に腹立たしい事に、卯ノ花は全死神の中で最も回道に優れた使い手。四番隊を率いる者としては的確だ。
その人間性と本性は別だが。
「聞いておくが、二代目の剣八を誰にするかは決めておるのか」
「目星は付けております。まぁ、十一番隊隊士全員といま一度刃を交え、その実力を測り直そうと考えていますが。その結果は後ほど書類で提出します」
「うむ……まぁ、順当に行けば副隊長かの」
「さて、どうでしょう。最近威張り散らしてばかりで腕を鈍らせているようですし……あの者なぞに〝剣八〟の名を譲るのは業腹ですね」
ふふ、と酷薄に卯ノ花が笑む。
口ぶりからも分かるが相当腹に据えかねているようだ。まぁ各所の副隊長からも評判は良くない。これから隊を引っ張っていく者としては不適当であるのは間違いない。
「よかろう。一先ず、この案を四番隊の隊長にも通してみる事にしよう」
「ええ、よろしくお願いします」
案としては悪くは無い。
問題があるとすれば、世紀の大罪人と知られる卯ノ花が来るかもし

れぬと聞いた四番隊各員の反応だろうか。あまりに拒絶反応が強いようなら代案を考慮しなければならない。
卯ノ花が十一番隊隊士を叱責したところで効果が無いのは目に見えている。
さて、どうしたものか……
「ああ。それと、もう一つ用件が」
これで終わりかと思っていれば、卯ノ花の話はまだあるらしい。思案を一時中断し、視線で先を促す。
「もし四番隊への移籍が決まった時、私は《卯ノ花烈》と名を改めます」
「……理由は？」
「私の意識を切り替えるためですね。流石にあの隊で八千流の名はそぐわないですから」
「……相分かった。その事も含め話を進めておこう」
「ありがとうございます」
婚姻をはじめ、何らかの理由から改名する者は少なくない。かく言う自分も一度名を変えた事がある。名を変えて意識を切り替える――それを経験した事がある身故に卯ノ花の言わんとする事は理解できた。
あの隊では剣の鬼としてではなく、死神随一の、回道の使い手として隊を率いる気でいる。
「お主、変わったのう」
「お互い様ですよ」
その変化が何を契機としたものか。問わずとも知れた事に、どちらからともなく口の端を吊り上げた。

七話・元柳斎の養子（孫）、大海を知る（―約１８９９年）

パラ、と本の頁（ページ）を捲る。

達筆な筆文字で綴られているのは過去の英知。尸魂界を守護し、現世の魂を導く死神に不可欠な知識と技術の結集。いま手にしている本は、その入り口とも言うべきものの一つだ。

死神とは中立でなければならない。

死神とは、人を守らなければならない。

なぜならば――

「世界の均衡を保つため、か……」

綴られた内容の要約が口から洩れる。

半ば無自覚に漏らしたそれには、少なからず畏敬の念が籠っていた。

＊

死神統学院。

死神になるための学校に入学した俺は、死神の開祖にも等しい総隊長から直々に鞭撻されていた甲斐もあり、一年目の講義の殆どを難なくこなせていた。成績優秀者として講師達からの覚えもめでたい。

ただ、残念ながら学友達からは距離を置かれている。担任の講師曰く、保護者が総隊長だから近寄り難いのだろうとの事だった。

放課後になるや否や街に繰り出したり、談笑に耽る学友達を見て思うところはあるが、仕方ないと割り切った俺は、余った時間を勉学に当てる事にした。

学院に入学した生徒は貴族のような特権階級を除き基本的に学生寮で暮らす事になる。これは流魂街で日銭を稼いでいた者達への救済措置のようなもので、寮暮らしの間は衣食住を保証される。俺の場合、山爺は貴族ではないので、入学と同時に学生寮に住まいを移していた。山爺と剣八さんとの鍛錬は時間の調節の兼ね合いから長期休

暇の間にすると決まっている。
つまり俺はあの二人との鍛錬の代わりとして、勉学に力を入れる事にしたのだ。
入学してから二週間。講義終了から夕食まではずっと図書館に籠り、夕食後も貸し出された本を読んで過ごす日々を送っている。無論、刃禅も欠かしていない。
まったく遊ばないせいで学友達からは『鍛錬馬鹿』と笑われているらしいが、仕方ないと割り切っている。
なにせみんなと違い、俺は知らない事がたくさんあるのだ。知りたいという欲求には逆らえない。
そうして本を手に取っていく中で見つけたのが、世界の均衡に関する歴史書だった。一回生に配布された教本には無かったため、もっと上級生になってから講義で使うのだろう。
なんだか先取りしたみたいで少しだけ誇らしさを感じながら、頁を捲っていく。
《世界》とはこの教本によれば現世と幽世（かくりよ）の事を指すらしい。幽世とは、死した魂が向かう先の世界――つまり尸魂界の事だ。
しかし、魂が幽世へ向かうには死神の導きが必要になる。
死神の導き無しでは尸魂界に来られない。地縛霊や怨霊になってしまい、果てには魂を害する存在《虚》へと堕してしまう。つまり、魂の輪廻転生が完了せず、現世に生きる魂の総数が減っていく。
それらを防止し、輪廻の巡りを円滑にする事が死神の務め。
そうしなければ世界の均衡が崩れ、現世も幽世も諸共に崩壊してしまうのだという。
「いったい何から守るんだろうと思っていたけど、思ったより壮大だな」
なんだか自分が思っていたより事が大きく感じられてしまい、死神候補生とも言うべき俺や学友達に、それが務まるのかと疑問を抱く。まぁ、やる事は『魂を導く』と『虚を浄化する』の二つだから解りやすくはあるのだが。
それに、と更に疑問が浮かぶ。

「しかし、この役目と貴族に何の関係が……？」
役目を考えるなら死神だけでいいだろうに、尸魂界には貴族という存在が在る。五大貴族を中心に存在する上流階級は尸魂界の創立に深く関わった者達の末裔らしい。
だが、その創立が何なのかは具体的には不明だ。
個人的にそこが気になって手当たり次第に読み漁っているが、未だこれと言えるものが見つかっていない。
ある程度までは過去を遡れる。尸魂界を創立した一族――そこまでは、解っている。だが創立以前の事について記したものは一つも見つからない。
まるで意図的に隠されているようにも思える。
「知られたくない何かがある、か」
パタン、と本を閉じる。
これ以上探したとて、死神統学院の図書館では貴族の成り立ちを綴った書物はおそらく見つからない。山爺のように隊長格や貴族と対談する権限を持てばまだ違うかもしれないが、少なくとも学生の立場では、まだ知るべきではないと判断されているのだ。それが貴族の集まりであり、尸魂界の最高統治機関《中央四十六室》の差し金だとすれば、これ以上は探らない方が身のためだ。
「……今日は借りなくていいか」
普段なら本の一冊の二冊は借りていくが、今日はこれ以上何かを読む気になれなかった俺は歴史書を書架に戻した後、何も借りず図書館から立ち去った。
＊
図書館を出た俺は、その足で学院の鍛錬場に足を運んだ。
鍛錬場には斬拳走鬼それぞれに適したものが用意されており、どれを鍛錬するかによって行く場所を変える必要がある。これを学年、組別で代わる代わる利用する事で普段の講義は回っていた。
四種ある鍛錬場の内、今日俺が選んだのは斬術の鍛錬場だ。
その理由として、斬術の実践講義はまだしていなかったためだ。霊力を持っていてもその扱いが不十分である者は、まず白打、走術から

学ぶ。霊力を十分に扱える者は特進組に分けられ、更に鬼道を教わる。これらは知識が大前提とされるため講義も前倒しにされているらしい。

自然、斬魄刀の素振りや模擬戦に関しては、後回しにされている。

鍛錬場で行くのは自ずと斬術のものになっていた。

「――あ、悠璃だ！」

屋内の鍛錬場に足を踏み入れたと同時、すぐ近くから声を掛けられる。霊圧で気付いていた俺は特に驚く事もなくそちらに顔を向けた。

声の主は入口近くの壁際に立ち、手拭いで流れる汗を拭いている。俺が図書館に居る間もずっとここで素振りか誰かと模擬戦をしていて、いま休憩を取っているところだったのだろう。

その人物は俺と同じ特進組の学生。

名を宮條木綿季（ぐうじょうゆうき）。五大貴族ほどではないが、それでも上流貴族に名を連ねる家の出だと聞く。

更に言えば、現状ほぼ唯一まともに会話している学友の少女だった。

「宮條さん、素振りでもしてたんですか？」

講師に対するのと同じく、慣れない敬語で応じると、彼女は「あー！」と大きな声を上げた。その表情には不満げな心情がありありと浮かんでいる。

「もー、また敬語になってる！　名前呼びでもいいって言ったのに！」

「……貴族の、それも当主に対してはちょっと……」

確かに本人がしていいと言ってはいるが、じゃあそうしようと思えるような立場に彼女はない。

本人から聞いた話だが、彼女の母親は体が弱く自身を生んだ時に亡くなり、父親は死神だったが虚との戦いで戦死。姉は一人いるが、彼女も生まれつき体が弱い。そのため繰り上がりのように自身が当主になったのだ、と彼女は語った。

本人は「お飾りだから」と自嘲するが――しかし、立場は立場である。

山爺は保護者、剣八さんは師弟の間柄だが、それは何れも貴族では

ない上に『公私』の『私』の部分での付き合いだからまだ気楽なだけ。彼女は貴族である故、たとえ『私』の関係だとしても気安くなるのは難しい。

「じゃあ賭けをしよう！　ボクが勝ったら敬語をやめて、名前呼びする事！」

「……入学主席が提示する内容じゃないと思うんですが」

あまりに一方的な賭けの内容にジト目を送る。

上流貴族の子として長らく教育を受けている彼女は、総隊長から斬術と白打、剣八さんから走術と鬼道について教わった俺を退けて主席を取っている上に、遥かに卓越した技量を持っている。斬術はまだ見ていないが、それ以外は俺以上の実力なのは間違いない。

「そもそも、宮條さんは俺の倍ぐらい霊力があるでしょう。既に公平じゃないんですが」

そして一番厄介なのは、この一年近くの期間で鍛えられた俺の倍の霊力量を彼女は誇っているという事だ。

山爺たち曰く、俺の霊力量は既に隊士に就いて数年の死神に相当するらしい。それの倍となれば、死神の上位に位置する席官に届き得るという事。

死神同士の勝負で大勢を決するのは霊力量だと聞いた。

もうこの時点で賭けとして不公平なのだ。

そう訴えるが、彼女はどこ吹く風とばかりに笑みを深くする。

「賭けっていうのは絶対に公平じゃないといけない訳じゃないもん。だいたい、弱い悠璃が悪いんだよ？」

真っ向から言われ、俺は思わず押し黙った。

……まぁ、賭けの内容はどうあれ、それに勝つ見込みが低い事――つまり、俺が弱い事が悪いのは確かだ。強ければ勝てる。それを分かった上で彼女は吹っ掛けてきている。

無論、この賭けに律儀に応じる必要は無い。

分の悪い賭けだと判断し、踵を返して寮へ戻っても問題はない。おそらく……いや、ほぼ間違いなく今後も同じような賭けを吹っ掛けられるが、実力を付けるまで応じないというのも一つの手だ。

――だが。
『お前は弱い』と。事実とは言え、それを真っ向から言われたのは。
すごく。
すっごく、頭にきた。
「――いいでしょう。俺が勝ったら、ご飯一回奢ってもらいますよ」
頬を引きつらせながらそう応じた途端、彼女が満面の笑みを浮かべた。
「ふふっ、そうこなくっちゃ！　じゃあ純粋な斬術で勝負！　白打、瞬歩も無しだよ！」
「望むところ……！」
鍛錬場の端に纏められていた木刀を手に取り、開いているところで互いに構える。
合図はない。
「参ります――！」
「来い――！」
山爺との鍛錬の時のように、どちらからともなく駆け出した。

＊

結論から言おう。
俺は負けた。
「……つっよ」
板張りの床に寝転がり、肩で息をする俺は、心の底から思った事を呟いた。
――正直、舐めていた。
慢心と言うのだろう。護廷隊と学院の創設者たる山爺、由来は知らないが『剣八』という異名を持つ隊長の二人から教わり、学院でも好成績を出している俺は、我知らず有頂天になっていたのだ。
思い返せばこの一年弱、鍛錬の時に扱かれた事はあるが、勝敗を決める試合をした覚えはない。試験はあるが、あれは山爺がほぼ攻撃してこなかったから成立したものだ。そもそもあの試験に合格できたのも霊圧の遠当てで意表を付けたからに他ならない。
純粋な斬術で言えば、宮條木綿季は山爺より劣るだろう。

だが――今の俺よりは、確実に上なのは間違いない。
その証拠に、傍らで俺を見下ろす少女はまだまだ余裕を残しているようで、さっき掻いていた汗はむしろなくなっていた。疲労させる事も出来なかったという事だ。
勝ち誇った笑みが途轍もなく憎たらしい。
「へっへー。これでもボク、ウチの家系では斬術の天才って呼ばれてるからね。師範からは六十年前に免許皆伝貰ってるし」
「六十年……」
告げられた年数に愕然とする。
六十年。
過去を覚えていない俺は、まだ一年にも満たない時しか生きていない。彼女はその六十倍の時間を掛けて斬術を、またほかの技術を鍛えていたのだ。
思わず苦笑が浮かぶ。
「勝てない訳だ……というか、もしかしてその霊力量って、結構抑えてたり……？」
「あー……」
俺の問いに、彼女はぽりぽりと頬を掻き、目を逸らす。曖昧な反応だが、それは雄弁に答えを語っていた。
どうやら俺の倍する霊力は彼女にとってかなり抑えた方だったようだ。
一体本当の霊力量はどれくらいなのか気になったが、それ以上に俺の思考を割く疑問があった。俺はその事について聞こうと思い、口を開く。
「それだけ強いのに、なんでこれまで死神になってなかったんです？」
「こら、敬語はダメだよ」
「……なかったんだ？」
びしっ、と木刀を突き付けられた俺は、語尾だけ言い換えた。それに満足したように頷いた彼女は、傍らに座るとやや厳めしい面持ちになった。
「端的に言えば、貴族の義務だから」

「……貴族の？」
「そう。貴族っていうのは尸魂界で生まれた魂魄で、生まれつき霊力を持ってる事が多い。それも、結構強い霊力をね。そういう人達の一番偉い人達が《中央四十六室》や五大貴族なんだけど……ここまではいいかな」
　その確認に、俺は起き上がりながら頷いた。丁度さっき歴史書で見た内容だったからしっかり覚えていたのが功を奏した形だ。
　俺が解っているのを見て、彼女は続きを語る。
「ああいう人達に比べればウチはまだ格が低いんだけどさ、貴族である事には変わりない。その貴族は四十六室に入る可能性を誰しも持ってる。護廷十三隊は、四十六室の指揮下にある。つまりすべての貴族は四十六室か、護廷十三隊に属する必要があるんだ。まぁ、厳密には家系の当主か直系の血筋の人が一人でも入ってればいいんだけどね」
「……えっと……？」
「つまり、当主しか護廷隊に入ってなくて、その当主が病没なり引退なりした場合、その子供が入る事が貴族の決まりだって事」
　それ彼女の境遇を喩えたものである事は理解できた。貴族の義務とはそういうものだとも、よく分かった。
　だが――それは、これまで死神にならなかった理由ではない。
　その理由はなんだろうと思っている事に気付いたか、彼女は更に話を続ける。
「でさ、ボクがこれまで死神にならなかったのは、お父さんが止めてたからなんだ。死神になったら死ぬ危険が多いから。ボク自身なりたいとは思ってなかったしね」
「……じゃあなんで斬術を習って……」
「あ、それはただの趣味」
「しゅ、趣味……そう……」
　あっけらかんと明かされた事実に俺は複雑な気持ちになった。こっちは割と真剣に鍛錬に打ち込んだため、それを趣味で越えられたのは得も言われぬ心地だ。

打ち込んだ年月が違い過ぎるから比べるのも烏滸がましい話ではあるが……

「――あ、そろそろ寮則の時間だ！　早く戻ろう！」

物思いに耽っていると、やや慌てたようにそう言われた。鍛錬場の外を見ればすっかり陽が沈んでしまっている。

釣られるように立ち上がった俺は木刀を返し、連れ立って寮の食堂へと移動した。

＊＊＊

その子を初めて見た時思ったのは、綺麗な子だなぁ、という感想だった。

山本悠璃。

その名を知らない学院生はおそらく居ない。学年主席こそ自分が取っているが、他の並みいる貴族の子息を押しのけて次席の座に就いた彼は、色々な意味で有名だったからだ。

美少女の見た目ながら男子である事はもちろん、その出自――彼が、総隊長の子供であるという事にも起因する。総隊長は結婚していないので養子である事は明白なのだが、彼が引き取られた経緯が謎に包まれているので、噂話は去年から広まっていた。その張本人が入学してきたのだから有名になるのは当然だ。

人当たりは良く、成績もいい。見たところ霊力操作も悪くない。それどころか霊力量も学友たちの中で上位に入る。

これで貴族出身でないというのがちょっと信じられなかった。

しかも、聞くところによれば過去の記憶が無いらしい。拾われてから一年弱で知識と技術を叩き込まれて入学したという彼は、その経歴の謎さ、また立ち位置の微妙な部分からか、学友たちから敬遠されていた。

それに気付いてはいる筈だが、本人は敬遠されている状況に然して反応せず図書室や自室で本を読んだり、鍛錬場でひとり鍛錬しているため、どう接すればいいか分からず学友たちも困惑していた。

そんな彼らを置いて声を掛けられたのは、偏に生きた年月や経験の差というものだろう。

ボクが習った剣術流派は『元流』。その開祖は総隊長。あの人の威圧に慣れてしまえば大抵の状況に狼狽える事はない。
「とは言え……ボクを相手に、四半刻も持ち堪えるなんてね」
そんなボクでも、流石にそれは予想外だった。純粋な斬術勝負で年下の子にああも耐えられるとは思ってもみなかったのだ。
これは自分も鈍ってしまっているかもしれない。
「流石は元柳斎先生の子……というよりは、彼自身の努力の賜物か」
誰かの子、というのは侮辱に当たるかもしれない。そう考え、評価を改める。
「ふふ……明日は、素直に鍛錬に誘ってみよっかな」
部屋の窓から空を見る。
夜空にはまん丸の月が輝いていた。

八話・元柳斎の養子（孫）、死を感じる（―約１８９７年）

死神統学院に入学して二年が経過した。

今年で学生生活も三年目となる訳だが、俺の学年は三回生ではなく、六回生――学院でも最高学年だった。

成績優秀、かつ複数の講師にも認められる実力を有している者は少しでも早く死神護廷十三隊に入隊させる仕組みとして、この学院には『飛び級制度』というものがあり、光栄なことに俺はその対象として選ばれたのだ。

ちなみに、一応受けるかどうかの選択権はあるが、俺の場合、保護者が総隊長という事もあってか半ば受けるよう強制させられた印象を受けた。

ついでに言えば俺はこの二年間の座学、実技の成績はずっと二位だ。

つまり一位がいるわけで、その人も同じく『飛び級制度』が適用されている。

その一位というのは、やや理不尽な勝負で名前呼びを強制してきた貴族・宮條木綿季（ぐうじょうゆうき）だ。

記憶喪失の俺の実年齢は不明だが、山爺曰く『恐らく現世出身だから十代前半』とのこと。そんな俺が付け焼刃で身に着けた知識、技術が何十年と生きた彼女に通用する筈もなく、未だ勝ちを取った事はない。

それは勿論、あの賭け事から通例になった鍛錬勝負でも同じだった。

「あ〟あ〟あ〟あ〟くそっ、ぜんっぜん勝てん！」

休みを求めて喘ぐ体を地面に投げ、最後の元気を振り絞ってがなる。勝てるだけの材料がないのは百も承知だが、二年間ずっと負け続けていると流石に嫌気も差してくるというものだった。

今日もまた腹に痛烈な峰打ちを喰らい、一気に体勢を崩された。
木綿季の特技なのか、あるいは山爺直伝の技なのかは不明だが、どうにも彼女の一撃を生身に受けるとこちらの霊力の流れが乱される。痛みを少しでも減らそうと防御に回した霊圧を崩し、その上で攻撃を通してくるという厄介さは俺が知る中でも特級だ。仮に席官級になる必須技術だとすると習得に苦労するだろうと思わせる技である。
二年間、ほぼ毎日刃を交えてきたが、未だ真似すら出来ていない。
彼女に勝つにはまだ研鑽が足りていないようだと幾度目とも知れぬ感慨を抱く。
「ふふん、まだまだ悠璃に負ける気は無いよー」
そんな俺を見下ろして、ほんのわずかに汗を滲ませる紫紺の少女・木綿季がにかっと笑う。
その笑みをぐぬぬ、と口元をひん曲げて見上げていると、ふと彼女の顔が感心したものに変わった。
「でも強くなってるのは確かだよ。霊圧も上がってるし、剣筋も鋭くなってる。たった二、三年でこれなら、あと五十年もしたら完全に追い抜かれちゃうかもなー」
「それは〝今の木綿季〟はだろ。その五十年で、もっと強くなるクセに……」
最初の頃は一滴の汗すら掻かせられなかったのだし、霊力量の上昇は実感できているから、木綿季の言葉も嘘でないとは分かる。六十年を剣に捧げたとは以前聞いたので、彼女の言葉は言外に『自分以上の才能かも』という誉め言葉なのだろう。
しかしその五十年を無為に過ごす筈も無い。
同じ時を生き、その〝時〟で対峙する木綿季に勝てるのは、もっともっと先の事になるに違いなかった。
その考えを読んだか、隣に腰を下ろした彼女はくすりと苦笑を漏らした。
「まぁね。というか、そう易々と若い子に負けちゃったら元柳斎先生に折檻されちゃうよ。あの人の折檻って恐ろしいんだよ、女の子にだって容赦しないんだから」

「あー……うん、だろうな」
俺の記憶にある山爺はとても優しい姿ばかり。鍛錬の時も厳しくはあれど、声を張り上げるような事はなかった。
しかし剣八さんへの刺々しさを思うと、木綿季の思い浮かべる姿もなんとなく予想が出来てしまった。『元流』の総師範でもあるらしいし、自ら志願して門下生となった人――しかも、死神として優秀な者には、それはもう容赦のない鍛錬を課したに違いない。
何れ自分もその対象になるのだと考えると、大人扱いされるようで楽しみもあるが、同時に恐れも浮かんだ。
「――女の子と言えばさ、悠璃ってぜんぜん背が伸びないよねぇ」
「ホント、人が気にしてる事をズケズケと……！」
丁度、胸中に浮かんだ恐れ――このまま成長せず、大人扱いされなかったらどうしようという悩み――を的確に突かれ、俺はまたぐぬぬ、と歯噛みする。
魂魄の成長、老化については個人差があるので不明なところが多いが、尸魂界出身の魂魄は概して百年前後で現世での成人くらいにはなるそうだ。そこから青年、中年、壮年と経るのに要する期間は本当に人それぞれで詳細不明。一説によれば霊力量の多さに比例して老化の進行は遅くなる、つまり寿命が長くなるとされる。
では現世で死に、尸魂界に来た魂魄はと言えば、基本的に成長しない。
鎖結、魄睡を有する魂魄の場合も殆ど変化が見られないらしい。とは言え、こちらも観察対象の少なさから断言までは出来ないそうだが。
つまり現世で死んだ魂魄と推定される俺は今後成長する可能性が絶望的。
尸魂界出身、しかもちょうど成長期にあたるためこの二年で三寸約十センチは背丈を伸ばした木綿季を、俺は羨んで見る事になっていた。この華奢さ、小柄さ故か顔馴染みになった商店にすら揶揄われる状況はやや苦々しい俺にとって、『成長』というのは喉から手が出るほど欲しいものだ。

「この間の身体測定、木綿季は五尺三寸約１６０ｃｍだっけ？　どんどん伸びていくな……」
「ボクは父親の血が濃いらしいからねぇ。だから、もうちょっと伸びるかも」
「その人の身長って……」
「六尺約１８０ｃｍは超えてたね」
「たっか……」
　誰もかれもが俺より背が高い上に、俺はそこらの子供体型の魂魄といい勝負が出来てしまう体格。
　……泣けてくる。
「うー……俺の斬魄刀、変身出来るのになったりしないかなぁ」
　そんな世迷言を口にしながら、俺は右手に握る抜き身の刀・浅打を見た。
　如何に『飛び級制度』を適用された学院生とは言え、流石に斬魄刀の解放まで出来てはいない。二年間欠かさず刃禅を続けているが手ごたえは特になかった。むしろ流している霊力を感じ取っていたせいか、操作技術の精密度が上達したくらいだ。
　なので俺の魂を写し取った形がどんなものになるかは手掛かりすらない。
　逆に言えば、どんな形にもなり得るという事でもある訳で、俺はその可能性に一縷の望みを託す考えもあった。
　斬魄刀の歴史は尸魂界のそれと同じくらい長く、古い。その歴史から系統分けもされているが、ひょっとしたら新たな系統として『憑依変身型』とか生まれるかもしれない。
　そんな俺の考えに、木綿季は苦笑に呆れを含ませた。
「そんな都合の良い能力になるわけないじゃん……大体いきなり背丈が変わったら間合いの管理とか体捌きとか物凄く大変そうだから、逆に弱体化すると思うけど」
「ぬぐ……ならもう、絶望的な自然成長に希望を委ねるしかないか……」
「ボクは今の悠璃もいいと思うけどなー。かわいいし」

「最後の一言が余計なんだよなぁ……！」
誉め言葉なのだと分かっているが、だからと言って喜べるものでもない。男に対して可愛いの批評はむしろ逆効果だ。
それを分かった上で言ってくるのだから木綿季も中々イイ性格をしていると思う。
まったく、と一つ大きく息を吐いた後、ぐっと足を持ち上げる。それから振り下ろし、勢いを利用して起き上がった。木綿季もそれを見てゆるりと立ち上がる。
「さてと、それじゃそろそろ帰ろっか」
そう言って手を差し出してくる。
「……いつも言ってるけど、俺だけでも走れるから」
「でも途中でバテるじゃん」
「俺は瞬歩を会得したばかりなんだよ！」
「うん、だからボクが引っ張っていこうっていう事なんだけど」
「それじゃ鍛錬にならないだろう……」
えーっ、と不満げに唇を尖らせる木綿季に、俺はまた息を吐いた。
斬術の鍛錬を終えた後、走術――すなわち瞬歩の鍛錬がてら、学生寮まで走るのがいつもの締め括りなのだが、大抵霊力切れで俺がバテてしまう。問題は瞬歩のために足裏に回す霊力操作が杜撰なためだ。一度で移動する距離を伸ばそうとありったけの霊力を使い、無駄が生じて枯渇する。
そんな事をするのも、それくらいしないと木綿季に追い付けないからだ。
逆に言うと自分の塩梅でなら枯渇する事無く学生寮まで帰れる。
それを伝えてからというもの、このやり取りが常となっている。引っ張ってもらえば確かに学生寮には易々と着くだろう。同行者の負荷を和らげるための霊力操作も、木綿季は既に身に着けている。
だがそれでは俺の為にならない。本当に急いでいる時や限界の時を除いて、俺は出来る限り自分の足で帰るように決めていた。多分これは常識的な思考の筈だ。
――もちろん、引っ張ってもらう事で嬉しい事も無くはない。

別々で走れば間違いなく差が開くから見えない事も、引っ張ってもらえば見える事がある。鍛錬に行き詰った時は木綿季の技術を見て学び、自分のものにする――それが俺なりの鍛錬法の一つになっていた。

この二年で強くなったと彼女は言ったが、それは彼女ありきでもある。

……正直、忸怩たるものは感じるが、一応それは割り切った。

山翁から木綿季が剣を学んだように、統学院の学徒が教師から学ぶように、人から教わったり技術を学ぶ事は決して恥ではない。恥なのは、己の尊厳に固執した結果死んでしまう事だ。

――そうと分かっていても、固執してしまう自分がいるのだが。

「あと、俺はまだ鍛錬を続けるよ」

そう言って彼女の手を押しのけると、すかさずええっ、と驚きを露わにした声が上がった。

「でも悠璃、もうすぐ暗くなるよ？　日没後は虚が偶に出るって話だし……」

「いやぁ……この辺は出ないんじゃないかな」

主に木綿季のとんでもない霊圧のせいで。

通常、虚は魂魄を食らうために現世に潜むが、ごくたまに尸魂界にも紛れ込む。そういった個体はあの世とこの世の境界に引っ掛からないほど弱く、死神を警戒するので霊圧の強い魂魄には近寄らない習性があるという。

そして俺は席官級、木綿季はその俺以上の霊圧を持っている。

仮に潜んでいたとしても、ここに来るのはある意味自殺紛いの行動なのだ。

……まあ虚は本能のまま動くらしいから、そのまま突っ込んでくる可能性も無くはないのだが。

「もし出てきても斬魄刀があるから大丈夫だよ。本当に陽が落ちる前には帰るし」

「ん、んー……し、心配だなぁ。だったら悠璃が帰るまでボクも一緒に……」

「いや、今日は屋敷に帰るとか言ってなかったっけ？　お姉さんが心配するからもう帰った方がいいと思うけど」
「うぐっ、そうだった……！　あんまり遅いと家の人が探しに来るかも……」
　あまり感じないが、木綿季は貴族なので実家は瀞霊廷の内側の屋敷だ。そこに帰る予定なのに一向に帰ってこないとなれば人が探しに出てくるのは自明の理。
　それはマズいと分かっているらしい木綿季が、いやでも、と俺を見ながら悩み続ける。
「さっきも言ったけど、陽が落ちる前に帰るよ。それとも俺の事が信じられないか？」
　そう言うと、木綿季がくしゃりと顔を歪めた。
「そういう言い方はどうかと思うよ。そりゃ、キミの実力は知ってるけどさ……心配するのと、信じるのは違うでしょ」
「……そうだな。ごめん」
　言われて、確かにと納得した俺は素直に謝った。
　父を殉死で喪っている彼女からすれば俺の言葉は受け入れられないものだとすぐに思い至ったからだ。その事を木綿季自身が自覚しているかまでは分からないが、不謹慎だったとは思う。
「まったく……じゃあ、ボクは帰るよ。でも本当に陽が落ちる前に帰るよーに！　流魂街の外側だから治安も普通に悪いしね！」
「分かってる。また明日」
「……うん！」
　俺の別れの挨拶に、それまでの険しい表情から一変して笑顔になった木綿季は瞬歩でこの場を去った。耳朶を打った微かな音と地面に小さく舞う砂埃が無ければ幻だったと思いかねない速度。
　分かっていた事だが、やはり霊力量はもちろん、操作技術も高い。
　俺も刃禅と瞑想、加えて日常の何気ない動作に於いても常に緻密な霊力操作を行っているが、やはり年季という差は易々と超えられないものだった。
　木綿季は、山爺を開祖とする『元流』を習い始めて六十年余りだと

いう。実年齢は多分そこにもう数十年を足したくらい。
自分の実年齢は不明だが、修行を始めた年月と比較すると、優に三十倍以上はある訳だ。
霊力量で劣っている以上、技量で越えようとあの手この手で精密操作技術を磨いているのだが……未だ、届いた試しはない。
「……遠いなぁ」
瀞霊廷――その中でも、教えられて場所だけは知っている宮條家のお屋敷がある方角を見ながら、溜息と共に呟く。
――貴族とは、世界の秩序を維持する役割を特に担う血族。
統学院の教本にも、貴族と定義したキッカケや要素に関しては殆ど記述されていない。しかし現実として、死神として不可欠な鎖結と魄睡を大抵有しており、各家から最低一人は死神、あるいは最高機関たる四十六室に名を連ねている。
ある意味、貴族は鍛えれば強くなることが保証されている。
その血族の生まれの木綿季が鍛錬をすれば、強くなるのは自明の理。
「……それに引き換え、俺はなぁ……」
ゆっくりとその場に腰を下ろす。視線も、地面に向けていた。
拾われてから三年近くが経った今も記憶が戻る様子はない。手掛かりもまったくない。まぁ、山爺曰く現世で死んだ魂だろうと推測されているので、もうその辺はあまり気にしていないのだが。
どうしても引っ掛かる事があった。
貴族である者。
貴族でない者。
尸魂界の生まれの者。
現世の生まれの者。
なるべくしてなった死神。
そうでない死神。
――俺は、どこまで強くなれるだろうか。
――山爺のように、なれるだろうか。
落としていた視線を天へ向ける。徐々に日が没し始めている空は

茜色に染まっていた。遠からず、周囲には夜の帳が訪れる。
まるで今の心境のようだと、そう思いながら、座禅を組んだ。
＊＊＊
「――あァ？」
陽が稜線に沈み、夜闇に包まれ始めてから暫く。いつものように適当なあばら屋で夜を越そうと考えていた時の事だった。
日中にも感じていた感覚が未だ消えていない事に気づいたのは。
その感覚には心当たりがあった。かつて死闘を経た事で、それを発する者が何であるかは知っていた。
「行ってみるか」
記憶にあるそれよりは遥かに弱く、小さい。日中だけという事から雑魚だと気にも留めなかった。日中であれば手近な連中の相手をして気にならなかった。
だが――夜も、となれば話は別。
興味が湧いた。
「錆落としぐらいにはなってくれよ」
クッ、と喉の奥で笑う。
刃毀れした刀を肩に担いで俺は外へ向かった。
＊＊＊
どれほど時間が経ったか。
座禅を組み、霊力操作に集中することで煩雑とした内心を整えていた俺は、時間間隔を一時的に失っていた。気付けばとっぷりとした夜。
完全に門限を破っていた。
――そんなことも、今の俺は気にしていなかった。
意識が現実に浮上したのは偶々などではない。何か物凄く大きなモノが、凄まじい速度でこちらに近付いている事に気付いたからだ。
そして、俺が立ち上がって腰の斬魄刀に手を掛けるのと、ソレが姿を現すのは同時だった。
「――テメェか」
「――お前は……」

互いに、返答を期待していない誰何だった。
おそらく互いに互いの存在を感知していた。その相手の姿を見て、納得するための一言。だから無反応でも気にしない。
いま気にしているのは――眼前の相手の、強さだけ。
そうして俺は、息を呑んだ。
――あまりに大きい。
存在感も、体格も、肩に担いだ刀も。何よりその身から発せられる暴力的な霊圧がそう思わせた。他の魂魄のために抑えているような、そんな自重性は見て取れない。そんな性格とも思えない。
これがこの男の素。
そして、おそらくここから更に〝上〟を持っている。
彼我の差は絶対的と言ってよかった。
「お前、死神か？」
「……いや、違う」
「そうか」
初めての問い。それに静かに否を返すと、巨漢は静かに頷いた。
――直後、担いでいた刀が振り下ろさる。
「――ッ?!」
反応できたのは奇跡と言ってよかった。
剣呑な空気は察していた。霊圧を垂れ流している点から、暴力的な性格だとも思っていた。何より、いつ斬りかかってくるか警戒していたから、俺は咄嗟に刀を抜けた。
真新しい斬魄刀と、古びて刃毀れの酷い刀が衝突した。
「ぐ――っ！」
手が、腕が痺れるほどの衝撃を受け、俺は咄嗟に後ろへ飛んだ。衝撃を幾らか流しながらの後退を、巨漢はしかし追ってこなかった。
振り下ろし、地面に叩きつけて止まった長刀を担ぎ直し、笑っていた。
「いい反応だ。刀が折れてないのもいい……――――――お前なら、いい錆落としになりそうだ！」
眼を剥き、大口を開けて巨漢が笑う。

それに呼応するようにその身から膨大な霊圧が発生した。さっきまでよりも更に膨れ上がったそれは、見慣れた青ではなく、巨漢の魂を映したような黄金色をしていた。
――それを背景に浮かび上がるのは、髑髏。
役割ではなく、正真正銘の死神を思わせる霊圧だ。
思わず足が、手が、刀が震えた。
「……はっ、冗談抜かせ」
恐怖を感じ、逃げたい衝動に駆られていた己を、鼓舞する事で抑え込む。
背中を見せた時、ヤツがどんな反応をするか確信が持てなかった。詰まらなそうにして追ってこないか、あるいは防げたのは事実だからと嬉々として追撃してくるか。
後者の可能性を拭えない以上、ここで迎え撃つことが得策だ。
――それ以上に、確信している事があった。
ここで逃げれば、きっと俺は逃げ続ける事になる――――その、イヤな確信があった。
「お前が、俺の砥石になるんだよ」
そこで、俺も応じるように霊圧を解放した。普段は同輩や流魂街の魂魄たちを傷つけないよう抑えているモノ――〝楔〟と呼ぶ自主的な封印――を外した、正真正銘の全力だ。
それでも目の前の巨漢や木綿季の全力と比べれば、何分の、何十分の一くらいでしかない。
霊圧が彼我の差である以上、その差は絶対的で、絶望的だ。こちらの攻撃は自然と垂れ流された霊圧の前で止められ、代わりにこちらの防御をあちらの攻撃は突き破ってくる。
まさに打つ手なしな状況だった。
「――〝霊刃〟」
だから俺は霊力の流れを操り、特に斬魄刀に込めるよう操作した。
斬られれば俺は容易く死ぬだろう。だがこうしなければ、俺の刃は奴の霊圧の前に防がれ、無意味に終わる。そうならないための手段。
それが〝霊刃〟。

木綿季、山爺や〝剣八〟といった膨大な霊圧を持つ実力者に有効打を与えるための、苦肉の策。俺ももっと霊力を持てば自然と成るだろうそれを、少ない霊力量でも為せるようにと編み出した小手先の技だ。

いつか、霊力の増加が頭打ちになった時のためのとっておき。

でも、それは諦観によるものではない。霊圧で劣っていようと一矢報い、勝利を奪い取ってやるという反骨の気概によるものだ。それと霊力操作技術とが合わさった結果の技だ。

――それを見て、漢はニィ、と凶暴な笑みをさらに深めた。

嘲笑いもしないそれは、強者の威風。

つられ、俺も笑った。

この時、既に手足の震えは無く。刀の震えも、霊圧のぶつかり合いで響くものに変わっていた。

――――踏み込みは同時。

顔を合わせてから二合目の交錯は、どちらも退かず、拮抗した。

＊＊＊

――ゾクリと、全身を襲う感覚を知覚する。

もうとっくに日は沈み、あたりは夜闇に包まれている。とっぷりとした夜。魂魄（人々）が寝静まり、代わりに潜んでいた虚がこっそりと動き始める時間帯。

そんな時間なのに、遥か遠くの地でせめぎ合う霊圧を知覚した。

どちらも知っている。

片や、獣と言われる凶暴な男のそれ。

片や、友と言うべき直向きな少年のそれ――

「あれほど帰るよう言い含めたのに――！」

夕食、入浴を済ませ、もう一刻ほどしてから寝ようかと思っていたからとっくに着替えていた寝巻を、手早く脱ぎ捨てる。新たに身を包むのは統学院の制服だ。上が白、下が紅のそれに身を包み、手近に掛けていた斬魄刀を腰に帯びる。

「あら、木綿季。この時間にどこへ行くの？」

それから廊下に出ると姉と鉢合わせた。

まるで図ったかのようだが、実際そうなのだろう。生まれつき体が弱いから霊力は少なく、死神にもなっていないだけで、その才覚は自分以上だと知っている。霊圧感知や霊力操作の観点で言えば自分以上なのだ。

霊圧の衝突で気付いた自分よりも先に、彼女は気付いた。

――その片方が、最近自分と親しい相手である事にも。

だから彼女は止めようとしている。

あの少年との関係に、彼女はあまり好感を抱いていないから。

「――腹の探り合いはお互い無しにしよう、姉さん。不毛だよ」

開口一番に言い放つ。

それはここ数年のやり取りを経た結論でもあった。

元々《貴族》なんて立場を自分は好んでいない。近づいてくる者達の裏を、敵視する者達の前提にはいつもこの立場があったから好きになれる筈も無かった。貴族の誇りや建前に――非常に悪く言えば――価値を見出せないと言ってもいい。

そんな自分に、《貴族》としての振る舞いを説かれても、何も響くものは無い。

それを言外に含んだ結論だった。

「――そうね。確かに、不毛だわ」

こちらの言葉を聞いて、それに含まれたものも恐らく察したのだろう姉は、何とも無いように頷いた。

――月光に照らされた姉の姿に、奇妙な圧力を覚える。

病弱故か、自分より五寸約１５ｃｍほど小さな彼女は、しかし《貴族》として真っ当に生きてきた人物。伏魔殿と言える社交界を生きる人物なのだ。

「だから、単刀直入に言うわ。あの子との縁を切りなさい。あなたはあの少年に、あまりに入れ込み過ぎている」

「……貴族の結婚相手は、同じ貴族でなければならない。そういう意味で言ってる？」

暗黙の了解のようなそれは、つまり明文化されたものではない。ただ貴族の格を保つためだけの不文律だった。

瀞霊廷が和を以て構築された時、それを為した中心人物が四十六室に名を連ねる者達。その配下が今の貴族。そうして瀞霊廷成立に関わらなかった魂魄達を内に入れる事を厭った末が、この決まり事だ。
自分は瀞霊廷成立後に生まれた身なので、当時どういう経緯があったのかを詳しく知らない。それを知るだろう母も父も既におらず、それを知る者に尋ねても教えてくれないだろう、知る者達からすれば成立後に生まれた自分達は同じ〝厭う存在〟だからだ。
故に、教本に当時の経緯は記されず、それを記した歴史書は禁書扱いで厳重にどこかに保管されている。
――なら貴族の建前を守る義理が無いのではないか。
彼らの建前は、瀞霊廷構築の経緯を知っている者にのみ通用する。そして同じ貴族でも知らない相手には教えようとしない。一当主相手にすらそういう対応なのだ。
なら守る義理はないというのが自分の本音。
だからこれまでである程度守ってきた建前を捨て、あの少年をはじめ、色々と絡むようになったのだ。
父の勧めで『元流』の門下生になっていなければ、きっと鬱屈とした気持ちのまま、唯々諾々と貴族子女として生きていただろうけど。
「建前はそれね。本音は、一人の姉としての想いよ」
それを知っている筈の姉は、やはり別の理由も用意していた。
遠くで激化する衝突を気にしつつも、彼女の言葉を聞き逃さないよう、意識を集中させる。
「あの子は……と言うより、その周囲が危険なのよ。かの凶悪犯罪者〝剣八〟の指導も受けていたと聞くわ。そんな話を耳にすれば心配するのは当然でしょう」
「彼が、〝剣八〟のようになると言いたいの？」
「可能性は零ではないでしょう。たとえ、剣の指導は受けていなくとも」
言わんとする事は察せた。
彼が元柳斎先生から斬術と白打を学び、今では元となる〝剣八〟から走術と鬼道、そして回道を学んでいた事も入学前から知っている。

彼女は、その関係性を危惧しているのだ。
それは一人の貴族として、痛くない腹を探られる事に関してか。
あるいは一人の子女として、危険な男と会わせたくないからか。
――どちらでも、同じ事。
そんなこと、自分とて予想は出来ていた。
その上で交流を始めたのだ。
「――悠璃は、〝剣八〟にはならないよ」
そして、その確信を得たから、交流を続けている。
悠璃という少年は、どこまでも純粋だ。
強さを追い求めている点で言えば〝剣八〟を想うのも仕方ないだろう。
しかしその根底はあまりに違う。
「彼はさ、ただただ大きな背中を追ってる子供だよ。昔のボクや姉ちゃんみたいなね」
「……」
当主を継いでから久しい呼び方を口にした。
母はおらず、父を失った自分達は、否応でも自立しなければならなかった。他の大人からすればまだまだろうが――それでも、自立しようとした。
だから姉は、貴族としての立ち振る舞いを重視する。
当主である自分以上に。
あるいは、当主なのに建前を守ろうとしないからこそ、か。
「彼が目指しているのは元柳斎先生だ。あの人を目標にしている限り、〝剣八〟になんて絶対ならないよ」
「……でも、総隊長はその〝剣八〟を殺さず、引き入れた。共感する部分があったからでしょう？」
そこで、姉が何を心配しているのかを朧気に察した。
彼女は、自分が〝剣八〟のように殺しに魅入られる事を危惧しているのだ。恐れていると言ってもいい。唯一残った肉親が堕ちるのを見たくないから。
――〝剣八〟が手に掛けた者達が、揃いも揃って強者であった事は

周知の事実だ。
その〝剣八〟を長に据えていた十一番隊が彼女に従っていたのも、畏怖故というのも周知されている。殺される恐怖はあるが、なによりもその強さに彼らは魅入られていた。
悠璃がそうなっている可能性も無くはない。
そして、吊られるように自分も――という危惧が、彼女の内心にあるのだ。
なるほど、と納得する。
続いて、しょうがないなぁ、と苦笑が浮かんだ。
「……なによ、いきなり笑って」
「いや、ね。心配し過ぎだなって」
「し過ぎって……〝剣八〟に関しては、し過ぎる事は――」
「ボクなら大丈夫だよ」
「――――」
割り込んで言った言葉に、姉の言葉が止まった。今度こそ驚愕を露に固まる。
その姉を、ぎゅっと抱きしめる。
病弱で、やせ細っている華奢な体だ。守らなきゃ、と思うと同時、だからこそ自分を拠り所にするのだとも思った。再認識したと言ってもいい。
「姉ちゃんがいるなら、ボクが魅入られる事は無いよ。だから安心して彼と交流できるんだ」
「……ばか」
互いの顔を見合いながら、彼女は罵倒してきた。小さく弱弱しい罵倒だった。
――それが、最後の抵抗。
自分を引き留めるための――けれど、無理だと悟った諦観の罵倒だった。
姉不孝だなぁと思いながら、それでもボクは、彼女を抱く腕を解いた。そうして体を向けたのは未だ衝突を続ける北の方角。
「……あなたが帰ってくるまで、起きていますから」

発とうとする隣で姉が言う。横目で見れば、隠すつもりもない呆れ顔で自分を見ていた。
その口元には、やはり呆れの笑み。
「だから……さっさと帰ってきなさい」
「りょーかい！」
彼女に笑みを向けて頷く。
そして、全力の瞬歩で北を目指した。

九話：元柳斎の養子（孫）、前へ進む（―１８９７年）

衝突は同時。
錯綜は、一瞬だった。
「おらァッ!!!」
刃を合わせ、拮抗したのも束の間。巨漢の気勢が増した。霊圧も、刀に込められた力も増し、力任せに押し切られる。
小柄な体故に、俺の体重もまた軽い。
その力に抗うことは出来なかった。
――勢いそのままに宙へ放られる。
霊力を足場として方向を調節。視線は常に巨漢を捉えつつ、態勢を整える。
その俺を追い立てるように巨漢が地面を蹴った。そのまま更に空を蹴り、男の跳躍が加速する。
思ったとおりだった。誰かから学んだか、あるいは見て盗んだかは不明だが、この名も知れぬ襲撃者は多少の走術が使える。瞬歩を使えなくとも、その膨大な霊圧任せで爆発力を得て、俺の走術に匹敵する加速力を以て襲い来るだろう。
これほどの力を持っていながらなぜ死神と思しき要素が無いのか。
霊力がある者なら積極的に声を掛けていると聞いている。その上でこれなら、この男は誘いを蹴ったのだろう。あるいは凶暴過ぎて手に負えないと考えたのか。
――――どちらにせよ、今は関係ないか
「考え事たぁ余裕だな！」
俺が思考を切り上げるのと、男が追い付いてきて刀を振りかぶるのは同時だった。
現実に引き戻された意識が刀の軌道を予測する。その軌道上に、鋭角になるよう斬魄刀を掲げる。ぎゃぎゃぎゃ！　と耳を劈く音と共に刃毀れした刃が火花を散らしながら滑っていく。
返す刀で、霊力を纏わせ鋭さを増す〝霊刃〟で斬り付けた。

――手ごたえは重い。
斬れた、とは言えない。切れたと言うべき浅さだった。浮浪者に多いボロボロな衣の下に仕込みでも入れたのかと思いたかった。それが男の霊圧の層で減衰された自身の斬撃の威力なのだと理解し、舌を打つ。
――――本当、やってられない
脳裏に浮かぶのは同輩ながら年上の貴族の顔。
単純な霊力量で言えば山爺、〝剣八〟師匠などの上がいるが、前者に純粋な斬撃は届かせられず、後者はそもそも斬術を習わなかった。必然的にこの二年間で最も多く刃を交えた木綿季の顔が浮かんだのだ。
霊力全開状態の木綿季とは、過去に一度だけ対峙した事がある。
互いに一撃を交わし、終わった。
俺の全力は解放された霊圧の前に阻まれた。
彼女の手加減された一撃は、全力の防御をあっさり貫き、刀を折ってきた。
それに比べれば、彼女に匹敵する――――いや、最早超えているだろう男の一撃を受け、刀が折れなかっただけ自分も成長していると言える。
問題は、勝ち筋がほぼ見えないという点だ。
俺の〝霊刃〟は男に届く。
しかし、決定打にはなり得ない。
戦況は木綿季との鍛錬と大差ない。唯一差異があるとすれば、俺が敗北した時、おそらく殺されるだろうということ。
――――死、か。
迫る刃の数々を必死に刀で受け、逸らし、躱しながら、心中で呟く。
概念としては知っている。知識としても知っている。既に現世での魂葬(こんそう)も経験済みだ。尸魂界へと現世の魂を送り、その後に流魂街のいずれかに分けられる事も知っている。
なにより。
俺は自我を覚醒させた直後、死に絶えた三人の死神の骸を見てい

た。
この男に負けた時、きっと俺も〝あんな風〟に死ぬのだろう。
――刃を止める。
宙に立ち止まった俺が、男の長刀を真っ向から受け止め、鍔迫り合いに持ち込んだ。
激しかった流れが止まる。
一瞬の静寂。
「――なぜ、殺そうとする」
自然と、静寂を突くように言葉が出る。
それは純粋な疑問だった。
――かねてからの疑問だった。
護廷十三隊がそう呼ばれるよりも前の話。荒くれと言うのも生易しいほどの殺戮集団だったと、かつてを知る人は語った。今ある死神のような明確な目的意識を持つ者が少なかった時代。霊力(ちから)ある者達は好き勝手に他者を傷つけ、暴力を謳った時代。
そうはならないよう、俺は教えられた。他ならぬ〝死神〟を作り上げた山爺によって。
その時、俺は疑問を抱いた。なぜ暴力を振るうのかと。
――人は死ぬ。
尸魂界に在る霊魂も、死神も、貴賤なく最後は死ぬ。
なのになぜ、他者を殺そうとする。
なぜ、殺される事で生を終えなければならない。
殺すために力を振るう事に、いったい何の意義を見出しているのか。それが俺には分からなかった。
「暇つぶしだ」
「――」
一瞬。思わず思考が止まる。
息を呑んで男を見上げた。
――男は、笑っていた。
口角を釣り上げ、可笑しそうに笑っていた。
「強エヤツとやり合うのは愉しいからな」

そう言った途端、男の中の感情（なにか）が弾けたのか、一段と放出される霊圧が強くなる。呼応して膂力も強化され、俺は力押しで弾かれた。
刀を正眼に構え直しながら、視線で男を捉え続ける。
「――あァ。それと一つ、お前は勘違いをしているぜ」
長刀を振り下ろした姿勢のまま、男が告げる。
――こちらを見上げる男の目と、視線が交わる。
ゾクリと悪寒が走った。
「やり合った結果、相手が生きてられなかったから勝手に死ぬんだ」
――強い奴をあっさり殺しちゃつまらねェからな。
ニィ、と深まる凄惨な笑み。
――確信する。
この男は、生も死もなんとも思っていない。ただ生きているから殺し合う。死んだ時はそのとき。だから殺す気ではいても、勝敗を決した時に相手が死んでいなければ見逃し、再戦を愉しみにする――
そういう刹那的な生き方で殺し合いを幾度も生き抜いてきたのだ。
あまりに独特な価値観。
あまりに傲慢な生死観。
この男ほど〝死神〟の務めからほど遠い男も居ないだろう。居るとすれば、話に聴いた史上最悪と言われる〝剣八〟くらいだ。
そして、それらが容認されるほど、この男は――強い。
「――八」
知れず、息を吐く。
口元が歪む。
それは虚勢の笑みだった。霊圧に中（あ）てられ震える四肢に、萎えそうな心を奮わせるためだけの張りぼての笑み。男のような力に裏打ちされていないハッタリだった。
そうでもしないと心が折れそうだったのだ。
――〝霊刃〟は、それでも頼もしい輝きを保っている。
鍛えてから約三年。その時間に裏打ちされた経験だけが、今の支えだった。
「なら、生きなきゃな。ここで死んじゃああまりに不甲斐ない」

そう自身を叱咤する。
思い浮かべるのは三年間で知り合った人々。その中でも特に鮮明なのが山爺と〝剣八〟、そして木綿季の三人。三人に教えられた全てをこの戦いで敗れた結果〝無駄（弱かった）〟と評されるのは嫌だった。
そう出来たのも、〝霊刃〟が無駄ではなかったと分かっているからだが。
「――イイ面（かお）だ。震えていた霊圧（チカラ）も、今はしっかりしてやがる」
同じ高さの宙に立った俺を見て男がまた笑う。
よく笑う男だと思いながら、つられて俺も笑みが零れた。
同時、俺の内側から生じる力の奔流が、より強まったのを感じた。霊力の増大。霊圧の増量――ここに来て、急な変化だった。
男もそれを感じ取ったか、ほぉ、と興味深げに目を眇める。
「更に圧も増しやがった。力を隠してたのか？」
「いや、そういう訳じゃない。ただあんたの生き方がキッカケになったんだ」
機会としてはそれしか考えられなかった。
男の死生観や価値観に触れた。共感こそしないが、しかし理解はした。〝なぜ他者を殺そうとする者がいるのか〟という長年の疑問に対し一つの答えを得たのだ。
この男は殺し合いを求める。だが、相手の死を求めてはいない。
求めているのは――闘争。ある種の直向きで強欲な渇望が根底にはあった。
だが男はきっと強さを得ても、それこそ世界最強と言われても満足しないだろう。男が欲しいのは栄誉ではない。実利でもない。殺し合いをする事こそが手段であり目的なのだ。
そして、その過程に自分は納得を抱いた。
自分とて未知の力――昔だと鬼道がそれにあたる――や強さを求め、鍛錬の日々を重ねてきた。殺し合いこそしないが、一連の流れは似ているところがある。
究極的にはこの男とすれ違うだろう。
俺は強さを求めているが、男は闘争を求めているのだから。

「俺はあんたみたいに強い人を知っている。その人達に追い付くことを……心のどこかで、無自覚に制限してたんだろう。俺はまだ力を持つ事が不安だったんだ」

――この理解と納得が鍵だった。

力を持つ者への疑問。

転じてそれは、自身が力を持つ事への不安でもあった。

山爺も、〝剣八〟も、そして木綿季すらも、数十年以上を生きる長寿の者だ。反面自分は自我が覚醒してから二、三年。外見から類推された年齢と足しても二十はいかないとされる身である。尸魂界の常識や暗黙の了解も知らない事が多い。

これまでは霊力がある者はみんな死神になって、世界の均衡保持のために動くと思っていたから、荒くれ者達や過去の殺戮集団について分からなかった。

そこに一つの答えを、この男は出してくれた。

胸のつっかえが取れたのだ。文字通り、霊圧の増大という形を引っ提げて。未だ木綿季にも、目の前の男にも届いていないが、それでも十分だ。

「人は未知を恐れるらしいが。未知でなくなったなら、もう恐れる必要は無い」

その言葉と共に、斬魄刀を突き付ける。

青白い霊圧が立ち上る。霊刃の輝きは今まで以上で、その鋭さも増している事が視覚的に分かった。心のつっかえが取れた事は鎖結と魄睡の活性化にも繋がっている。

「ハッ――ハッハッハッハァッ!!!」

そんな俺を見て、男が初めての呵々大笑を見せる。可笑しくて堪らないというように。

嬉しくて堪らないというように。

天を仰いで笑っていた男が、その面を下ろした時の笑みは――これまで以上に凄惨で、殺気に満ち溢れていた。〝剣八〟が偶に向けてきた視線と通ずるものを感じる。

「いいじゃねェか！　テメェとなら、最高の殺し合いが出来そうだ！」

「ハッ……行くぞッ！」
「来いッ!!!」
互いの表情は笑み。
交わすのは殺意。
向けるのは刃。
交錯する二振りの刀。片や刃毀れの酷い長刀、片や傷がつき始めた斬魄刀の競り合いは、どちらも一歩も退かずの互角の勝負。
見下ろしてくる視線は獰猛だ。
きっと、返す俺も同様だろう。
――弾かれたのは、今度は両者。
距離が開く。
開いた距離を、再び詰める。
思考に上がるのはただ〝前へ〟という一言。
最早逃走の思考は無い。目の前の敵をどうやって斬るか、という思考にのみ振り切れている。
敗北の懸念も無い。全力を振り絞れば死なないという、根拠のない自信があった。僅かな勝ち筋を手繰り寄せ手にしてみせるという気概があった。
この男の前では、弱気なんて持っている余裕はない。
全力を傾けろ。
心力を尽くせ。
全霊を賭せ。
魂を、奮わせろ――――
「おおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」
「オオアアアアアアアアアアアアアッ!!!」
裂帛の咆哮。
あちらも上げたそれに、負けてなるかと踏み込み、刀を振るう。

被弾はギリギリで躱す。かすり傷は、この際無視した。些事に意識を向ければその一瞬で食い破られる。最初のような様子見はもう無い。一瞬の隙が生死を決めるのだ。

偶に浅くない傷を負うが、男が距離を離した時に合わせて回道で応急処置をする。俺の腕だと短時間の回道では傷を塞ぐまでしか出来ないがそれだけでも十分だった。

男も大小無数の傷を受け、血を流している。だがそれを痛痒とも思っていないように動きを止めない。

最早赤くない部位が無いほどお互いに血に染まっていた。自分が流した血か、それとも返り血かも定かではない。

それが気にならないほど、俺も男も、目の前の〝敵〟との戦いに没頭していた。

疲労はあるが――

「――シィッ!!!」

鋭い呼気と共に、霊力を練り上げる。

練るのは鬼道。詠唱は破棄。番号は四の白雷（びゃくらい）。本来なら指先から矢の如く一条の雷を放つそれを霊力に合わせて自身に流し、全身を賦活する。

回道を教わる過程で人体を学び、霊子構造を知った結果、霊力操作技術にものを言わせて編み出した我流の回道である。

ただし、邪道だ。

通常の回道では傷を癒し相手の霊力を多少回復させられても疲労までは打ち消せない。この回道もそこは同じだが、違う点と言えば〝疲労〟という感覚を一時的にマヒさせる事に特化していること。無理矢理自身の最大の能力を引き出すようにするのがこの我流の回道だった。

治癒とは言えないそれは、治療に使われる麻酔と同じ。

そのために白雷を使って一時的に感覚をマヒさせた。一歩間違えれば五感を喪い、筋肉も傷める危険なそれは、しかし正確に自分の体を知った事で完成させられた。

――後が怖いが、今はいい。

今は体を動かす手が必要だ。
この男の霊圧の前に、鬼道は通じない。瞬歩も見切られる以上使うだけ体力と霊力の無駄だ。
すべての霊圧を肉体に回す。白打の基本であり、俺は必要な時に必要な部位の強化をし、無駄をそぎ落とした。その上で自己治癒も合間に施す。
だが、それでも男は倒れない。
斬り付ける。
血は流れるが、両断まではいかない。男の斬撃を躱すためにこちらから刀を引くからだ。
あちらの斬撃も俺を捉え切れない。瞬歩を会得していたお陰か、反応速度はこちらが優っているようだった。小柄なのも大柄な男にとってやり辛いだろう。
今の俺なら男を殺せる。
男の攻撃は俺を殺せる。
しかし、どちらも致命打に一歩届かない状況が続いていた。
――それでも。
男も俺も、笑っていた。
「――テメェ、名は?」
幾度もの応酬の後、ふとした時に流れが止まった。
それで気が向いたか男が尋ねてくる。長刀を担ぎ、笑みを浮かべたそれに他意は見えず、純粋に知りたいから問うてきたのだと分かった。
「山本悠璃」
「そうか」
ならば教えない理由も無いと、俺も応じた。
男は短く頷いた後、口を開いた。
「思った通り、名があるのか」
「……あんたには無いのか」
「おう。俺ァ流魂街の生まれ、覚えがついた時から名はねェな」
そこまで言った男は、だが、と続けた。

「呼び名はある。いつどこで誰が呼び始めたかは知らねェがな……呼び名は、〝更木の獣（ケダモノ）〟だ」
更木。それは北流魂街で最も外周にある区画の名前だった。
男が浮浪者の装いなのも、殺し合いを日常とする殺伐とした日々なのも、流魂街の外に位置するところの生まれだからしい。
とは言え親は居ないようだ。捨て子というのも、外周に近い区画では珍しくないという。名前も、いつしか自分でつけたり、他者が呼び始めたものが自分の名前になるそうだ。
男はまだどちらでもない。男自身が名前に頓着していないせいだろう。
「言い得て妙だな。あんたの気配は、正しく獣のそれだ」
「そう言うテメェも、最初とは打って変わって笑えてるじゃねェか。殺し合いで笑う奴を見るのはテメェで二人目だ」
「その一人目はあんた自身か？」
「違ェよ」
どちらからともなく、笑みを深める。
――対等に軽口を交わしたのは、初めてか。
学友達とも交わした覚えはない。木綿季とは、対等に交わせていない感覚がある。
初めて対等な立場の相手が出来た気がした。
「――ああ、惜しいな。あんたとはまだやり合っていたいと思うんだが。俺の体の方が持ちそうにない」
心の底からの言葉だった。
学友とも、木綿季に対するものとも違う、心を許した者への言葉だった。
男はそれをハッ、と鋭い呼気と共に笑った。
「テメェが生きてりゃ何の問題もねェ」
「……そうだな」
僅かに気落ちしていた心が再燃する。萎みかけていた霊圧も、再度活性化した。
――どちらからともなく構えを取った。

俺が限界である事を、男も知った。そして勝負を満足に終わらせるべく次の一撃に集中し始めた。
どう転ぼうと次の一手で幕だ。
気合を込めるのと同期して、今日一番の輝きが立ち上る。斬魄刀の刀身が眩いほどの霊光を放っていた。
男の髑髏の霊圧も同様だ。長刀の響鳴（きょうめい）が、高まる霊圧の唸りを伝えてくる。
――行くぞ。
――来いよ。
視線だけの会話。
言葉も飛ばした意志だけのそれは、俺が挑む側で、男が待ち受ける側のまま――それでも、踏み込みは同時だった。
男が上段から袈裟掛けに長刀を振るう。
対してこちらは左切り上げに斬魄刀を振るった。
刃が交わる。
霊光が弾け――――

＊＊＊

カッ！　と、夜闇を引き裂くように一際眩い輝きが迸った。
一拍遅れ、轟音と激震が尸魂界を走り抜ける。遠からず護廷十三隊の死神が調査のために派遣されるだろう。調査と言ってもこの事態の原因の片割れが死神で知らぬ者は居ないだろう総隊長の拾い子、もう片方が〝更木〟に棲む獣である事は霊圧から筒抜けなわけで、形だけで終わるのは目に見えている。
しかしそんな事は自分には関係ない。
幾つもの悪評を持つ獣に狙われてタダで済む訳が無い。そうして命を落とした者が少なくない事は、調べがついているのだ。
だから悠璃を早く助け出し、怪我をしているなら腕のいい回道の使い手に診せなければならないと、心中には焦燥があった。
――結局、ボクがその場に到着したのは、決着が着いた時だった。
大きな人影は左腰から右肩にかけて大きな切り傷を受け、仰向けに倒れていた。その顔は憎たらしい満足そうな笑みを浮かべている。

気を失っているのか目は閉じられていて、さっきまでの膨大な霊圧を殆ど感じない。
その大男の前で、刀を振り上げた姿勢で止まったままの小さな人影があった。こちらも霊圧の高まりは既に収まっている。
「悠璃？　大丈夫？」
声を掛けるも返事は無い。
近寄って顔を覗き込めば、彼は立ったまま気を失っていた。目も白目を剥いてしまっている。
「……可愛い顔も、これじゃ台無しだねぇ」
はぁと溜息を吐いた後、とりあえず怪我の応急手当をする事にした。刀を鞘に納め、横たえた彼の体を簡単に検(あらた)める。
結果、溜息を吐く事になった。
この少年、小さな傷は多く受けているが、致命傷は一切無かった。多分戦いの中で自分で治したのだろう。元〝剣八〟に回道の手解きを受けていたとは本人からも聞いているし、その腕は鍛錬の中で幾度となく目にしている。
回道を修めたのも本来は戦い続けるためではないと思うが……
「ま、とりあえず当分は安静にしないとだね」
傷は塞がっているが、流れた血までは回道でも戻せない。暫くは精の付く食事と静養に努めるしかないだろう。毎日行っていた鍛錬も中止だ。日常生活に支障が無いなら学業には出るべきかもしれないが、その辺は本人の状態と応相談といったところだろう。
ちなみにこの間、獣も血を止めどなく流しているのだが、当然のように放置だ。
危険人物とされる者まで治してやる義務は貴族であろうと無いのである。
「これは、驚きましたね。まさかあの子が敗れるとは」
――瞬間、重い霊圧が圧し掛かる。
並みの霊魂なら気絶、あるいは委縮しているだろうそれを発してい

るのは、この場に着たばかりの死神だった。『四』の隊首羽織を纏う黒髪の女性。
名を『卯ノ花烈』。
だが――元の、名は。
「……卯ノ花、八千流（やちる）殿」
「あらあら。私は、そのような名ではありませんよ」
月光を背にこちらを見る女性の顔には柔和な笑みが浮かんでいる。
とても史上最悪の犯罪者とは思えないそれは、当然ながら作られた笑みであり、仮面。その名も同じだ。
「せめてそのドギツい霊圧を収めてから言って頂きたい。それに、私はともかく、この子の容体に差し障る」
「あら、それはいけませんね。救護を任される隊の長としても、その子の師としても」
にこりと微笑みながら卯ノ花隊長は霊圧を収めた。存在感はあるが、それでも先ほどより随分マシだ。
――その女の目は、膝に乗せた少年に固定されている。
女の瞳には冷たい色があった。何を考えているか読めず、自然と警戒してしまう。
「――何事かと思って来てみれば、戯言が聞こえたのぅ」
その空気を割るように、いつの間にかこの場に新たな死神が現れた。
護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國が杖から斬魄刀を取り出した状態でその場にいた。更木の獣、卯ノ花、自分で三角形を作る位置取りの、その中心に立っていたのだ。
霊圧を感知させないその技術、また音を立てない走術の腕、ともすれば鬼道を併用したのだろう総隊長の出現を自分は察知できなかった。
卯ノ花が察知出来ていたかは分からない。表情に取り立てて大きな変化は見られなかった。
――しかし、まさか総隊長自らが足を運ぶ、とは。
調査の手が伸びるとは思っていたがよもや総隊長が来るとは思っ

ていなかった。
　噂ではこの少年が相当気に入られていると聞いていたが、どうも予想以上だったようである。卯ノ花は師弟の関係――というよりは、どうも更木の獣と何かしらの関係があって足を向けたような発言があったから、微妙なところだ。
　ともあれ総隊長の登場は願ったりな話である。
　自分と総隊長の関係は『元流』の師弟止まりだが、悠璃に関してで言えば同じ陣営。つまり絶対味方だ。これほど頼もしい味方は他に居ない。
　何やら卯ノ花と総隊長の間にも確執があるようだし。
　まぁ、それら含め、自分が下手に何かを言えるような雰囲気ではないけど。
「卯ノ花隊長、お主はなぜここに？」
「馴染みのある者の霊圧が大きく揺らいだのを感じたからです。治療の必要性があると判断し、そこへ赴くのは別におかしな事ではない筈ですが。それに総隊長もなぜこちらに？」
「並みの隊長格を凌ぐ霊圧に一般隊士を向かわせる訳にもいかんからのぅ。加えて、お主が向かっているとなれば猶更よ」
「あら。心配されずとも、今の私は患者の治療に専念する救護隊の隊長です。判断を誤る事は致しませんわ」
「戦いが終わっていれば、じゃろう？」
「……うふふ」
　じわじわと、滲み出る霊圧の鬩ぎ合いがこの場を支配していた。卯ノ花のドギツい霊圧と総隊長の威圧感溢れる霊圧の衝突は正直生きた心地がしない。
　早く終わってくれ――
　その願いが叶ったのか、どちらからともなく霊圧は収められた。
「……不毛じゃな」
「そうですね……とりあえず、傷病者の治療に入ります。まずは悠璃からですね」
「まずはって……まさか、あの男も治療するんですか？」

思わずそう問いを投げた。即座にしまったと思うが時すでに遅く、卯ノ花は届いた言葉に対し、首肯を返した。
「無論です。味方だろうと敵だろうと、診察台の上では区別はありません。四番隊にとっては全て等しい患者なのですよ」
「……」
その言葉を、一般の救護隊員から聞ければどれほど良かったかと、思わず思ってしまった。過去を知っているだけに卯ノ花のこの言葉が胡散臭く思えてならなかった。
横目で総隊長を見れば、あちらも物凄く微妙な視線を卯ノ花に向けていた。
ともあれ彼女の回道の腕前は現尸魂界でも随一なのは確かなので、治療を任せる事にした。
その後に待っているのは事情聴取と事後処理。
とは言え数秒の時間差で到着した程度だったので聴取もすぐ終わる。院生なので事後処理に直接関わる事は無く、すぐに立ち去る事になった。
気を失ったままの悠璃は怪我の経過観察込みの療養のため、総隊長が自身の屋敷に引き取る事になった。
何はともあれ、総隊長自らが動くなら事態も収束するだろうと思い、ボクは姉が待つ屋敷への帰路に就いたのだった。